

---

# ひとりかくれんぼ

笠井藤吾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひとりかくれんぼ

### 【ZINE】

N1830M

### 【作者】

笠井藤吾

### 【あらすじ】

2ちゃんねるオカルト板「ひとりかくれんぼ」を元にして創作したお話です。

ここに書かれたことは全てフィクションですので、予めご了承ください。

また、これを読み、「自身に何らかの影響が出ましても、私は責任を取れません。」  
注意してお読みください。

「ひとりかくれんぼ」に関しては、ぐーぐるで検索してください。  
また、「ひらり」を製作するにあたって、まとめサイト様を参考にさせて頂いています。

5月23日 05:22 (田)

5月23日 05:22 (田)

暑い。暑いと怪談話が聞きたい。検索してはいけないワードをぐぐるのが一時期の趣味でした。くねくねが今のところ最強だったね。なつみSTEPはじめわじわくる。あとは、あれ…うわー思い出したら怖い。あれよ、ひとりかくれんぼ。まあ、読みものとして面白い。去年のこの時期読んでたな。携帯からも探せば読めるから是非、通勤通学中周りに人がいる時に暑苦しい電車の中で読めばいいです。一人の時は激しくおすすめしません。ところで最近…

ブログには、そんなことが書いてあった。検索してはいけないワードは、YOUTUBEで見たつけ。どれもネタバレを兼ねていたものだけど、大して怖くはなかった。しかし、その中にひとりかくれんぼなんてあつたつけ、もう随分前のことだから、記憶が薄れているだけかもしれないが、どんな話だかは思い出せなかつた。

最初は面白おかしく映画の感想を書いていただけのこのブログは、管理人が飽きたのか、最近はこんな風にくだらないことばかり書いてある。もういい加減見に行くのをやめてもいいのだが、習慣というか惰性で携帯のブックマークをクリックしてしまう。いい加減、ブックマークを外さなければ、と思いつつ、Yahooを開いてそれを探した。ひとりかくれんぼ、すぐに出てきた。発祥は2ちゃんねるらしい。とりあえず一番上の「手順」を読んだ。

- 手順 - - - - -

### 「用意する物」

- ・ぬいぐるみ（手と足があるもの）
- ・米（ぬいぐるみに詰められる程度）
- ・縫針
- ・糸（赤）
- ・刃物や錐など、鋭利な物
- ・塩水（コップ一杯ほど。天然塩がベター）

### 「事前準備」

- 1　ぬいぐるみの綿を全抜き、代わりに米を詰める
  - 2　自分の爪を切り、かけらを入れて縫う
  - 3　縫い終わったらそのまま糸をぬいぐるみに巻付け、ある程度巻いたらくる
  - 4　風呂桶に水を張る
  - 5　隠れる場所に塩水を用意しておく
- 
- ### 「実行手順」
- 1　ぬいぐるみに名前をつける（自分の名前以外なら何でも可）
  - 2　3時になつたら、『最初の鬼は　（自分の名前）だから』　とぬいぐるみに向つて3回言つ
  - 3　風呂場に行き、ぬいぐるみを風呂桶に入れ
  - 4　部屋に戻り、家中の明かりを消して、テレビをつける
  - 5　目をつぶり10数えたら、用意した刃物を持って風呂場に行く
  - 6　ぬいぐるみのどこへ来たら、『（ぬいぐるみの名前）見つけた』　と言つてぬいぐるみを刺す
  - 7　『次は　（ぬいぐるみ）が鬼』　と言いながら置く
  - 8　置いたらすぐに逃げて隠れる

### 「終わり方」

- 1　塩水を半分口にふくみ、隠れる場所から出て、ぬいぐるみを

探す（途中で塩水吐かないよう注意）

2 ぬいぐるみを見つけたら、  
口の中の塩水も吹き掛ける  
残りの塩水をぬいぐるみにかけて、

3 私の勝ち』と3回語り

4 めぐみに必ず捨てないと（最終的に燃えるかたせて）

■ 注意点 ■

- ・家の外に出ない
  - ・電気（明かり）は必ず消す
  - ・隠れる時は静かに

・同居人かしると  
同居人に危害が及ぶどしひ嘆もある

- - - - -

「Jの時点では十分怖い。幽霊的なものに关心は薄かったが、これら十分に何かを呼び出せそうな気がした。恐ろしさと好奇心に苛まれながら、私は早速本スレ過去ログを読み漁った。

くく1と名乗る人物が、ひとりかくれんぼの手順を書き込み、何人かの参加者が掲示板を使い実況していくというものだ。必ず、と言つていいほど、その空間には何かが起こつた。何かの小説を読んでいるようだつた。そこにあるのは確かに恐怖、そして、警告を呼びかける者たち。それと比例するように、好奇心は育つていく。

ひとりかくれんぼには諸説あり、呪術とか、黒魔法とか、また、精神的パニックを呼び起こしているだけとの説。真意は分からぬし、勿論、ここに書き込まれているものが全てだとは思わない。この実験参加者にしても嘘かもしれないし、時折出てくる画像もでっちあげという可能性もある。しかし、それがそうだと思つほど、

自分自身がやつてみたい、という衝動に駆られる。

しかし、掲示板に書き込まれているものが全て事実だとすると、恐ろしい。中には狐に取り付かれた、という話もある。リスクを犯してまで、ひとりおにじっこをやるが、という勇気は私にはなかつた。

「愛、ブログ見た？ ひとりかくれんぼってヤツ

月曜日のお昼休み、昼食を広げているとサチが嬉しそうに私に聞いてきた。

「見たよ。暇だから、言われたサイトも見てきた

「マジでー！ あたしも見たッ！ つかあれマジ怖くね？ 電波途切れるとかあの人人のコメ欄で誰か言つてたじゃん？ 私も探してる最中電波切れたの！ 超怖い

「私は何もなかつたなあ。普通に夜は怖かつたけど

「ひとりで読んだの？」

「まさか。家族がいる居間で読んだよ

「だよねー。でもちょっと面白がつ

サチがペットボトルを開けると、炭酸がプシュッと音を上げた。面白そうとうとうサチの目は間違になく、やりたい、と言っている。

「やつたらいいじゃん？」

「やだよー。だつて超怖そつ。やつてもいいけどー、何か起こんの

嫌だし

「でも何か起こんないとつまんないじゃん

「じゃあ愛やつてよ

「何か起こると嫌だから嫌です

「何だよーそれえ」

まあ結局そういう訳だ。好奇心は恐怖に勝つが、実際のところ利害には勝てない。好奇心はあるが、何らかの被害が及ぶのが怖くて、実際には行動できずにいる。私もサチもそつ。といつも、まともな人間ならやらない。だって、リスクでかすぎる。

「でも、これガチで起こったのかな？」

「さあ、半分くらい釣りじゃないの」

「ですよねー…でも、本当のこともあるかもしれないよねー」

「…私、やんないからね?」

サチにきつぱつと並んで。やつてよ。いやひひよ。の誘いを感じたのだ。サチは昔から少し強引なところがあるから、いつもして牽制をしておかないと駄目なのだ。

しかし、てつきりむくれるかと思つたサチは、私の予想の反してにっこりと笑い、サンドイッチの殻をぐしゃぐしゃと片付けはじめた。

「あんせア、1組のね、井坂サンって知つてる?  
「知らない」

もう言つと、サチはさらににっこりと笑う。この笑みは、何か悪いことを考えている時の笑みだ。サチは楽しそうに並んで。

「そつか、愛は知らないんだね。うちの中学ではすつじこ有名だつたんだけどー、井坂サンつてさー、超靈感あるんだつて

「なに、中2病?」

「さあ? マジであるつて本人言つてるし、あるんじゃね? そじ子すつじこオカルトが好きでさー…ね? いわすもがな

いわずもがな、その通りに言わんとしている事は分かる。

何だ、その井坂つて子にやらせようって魂胆だが、なんだか居たまれない。が、サチは急に席を立つて、私の腕を引っ張った。

「えつ、今行くわけ！」

「絶対井坂サン喜ぶつてー。じつじつ話好きだし。私と愛が待機係になつてあげればいいじゃん？ね？」

そのまま教室を連れ出され、1組へ。1組の教室前廊下は人で賑わっていた。サチは、私に待つてて、と手で合図し、1組の教室の前で男子に話しかけた。そしてかわいくおねだりポーズ。男子は一瞬嫌そうな顔をしたが、仕方なさそうな面持ちで教室に入つていく。サチはすぐ可愛かった。そして、ちょっと我慢だ。まさに小悪魔！なんて思つていると、1組の教室から、一人の女子が出てきた。ロングの黒髪で、前髪でよく顔が見えない。正直な感想、ちょっとと氣味が悪い感じだ。恐らく、あの子が井坂さんなんだうなあと思つていると、案の定、サチが私を手招きした。

「井坂サン、久しぶり！祥子<sup>サチコ</sup>だよー、覚えてる」

「…久しぶり」

「でつ、こつちが親友の愛ー愛、井坂ななみサン」

「は、はじめまして…」

「はあ…」

なんてぎこちない挨拶だらう。そしてこの白々しさ。ここにこじているのはサチだけだ。私と井坂サンのまごつきよつ。しかし、それにお構いなしでサチは話を続けた。

「あつ、ねえ。それで、井坂サンをア、单刀直入に聞くけど、靈感

あるんだよね？」

それは確認というよりも、嘲笑にも近い響きを持っていた。井坂サンは一瞬驚いたような顔をしてみせたが、すぐに返事をした。

「うん、あるよ

イタタタタタタ…！居たたまれない、私が居たたまれない。サチが私を横目で見て、にやにやと笑う。

「そうー…やつぱりーあのね、私たち本当に靈感をある人を探しててー、ねえ？愛」

「えつ」

「でね？愛の中學にも靈感があると言えば、井坂ななみつていうくらい、井坂サンって有名人だつたつて聞いてー…ね？」

「あ…う、うん…」

サチは私に頷くように促す。勿論、私は井坂サンのことなんか全く知らないし、噂にだつてなつたことはなかつた。サチは大胆な嘘をつきすぎだ。しかし、井坂さんは嬉しそうな、照れたような返事をする。

「そ、それほどでもないけど…まあ、僕は普通の人よりは見えるからね…」

そして、くすくすと笑う井坂サンは本当に不気味だ。黒いストレートの髪の隙間から口と<sup>片</sup>目<sup>が</sup>笑つてゐる。まるで貞子だ。しかしサチも乗つていく。

「だよねえーで、さあ、ちょっと相談があつてー、井坂サンにしか

頼めないって思つてー」

そして、サチは自分の淡いピンクの携帯を取り出した。そのまま、その画面を井坂サンに見せた。

「あのね、ひとつかくれんぼつて書つて……」

5月24日 01:22 (月)

5月24日 01:22 (月)

今日も一日疲れた?。「ひとりかくれんぼ」結構読んだ人がいたみたいでよかつたですか?。怖かる?怖かる?尚、怖い話とか紹介はしますが、その後は何も責任を持てません。自己責任で読んで下さい(^(^o^))なんかそういうの憑きやすいんだけど読んだら憑きましたツ具合悪くなりましたツ管理人責任取れおな!って言われても、何も出来ないからね…「ごめんよ?」。

なんだか薄気味悪い文章だ。何か苦情でも来たのかな、と思いつつ、携帯を閉じた。

結局、サチは井坂サンにひとりかくれんぼをやらせることに成功していた。実行は井坂サン、私とサチは見張り。

好奇心は恐怖に勝つが、実際のところ利害には勝てない。好奇心はあるが、何らかの被害が及ぶのが怖くて、実際には行動できづにいる。そういう時はどうすればいいか。サチは可愛く笑った、他人を使えばいいんだよ。

しかも、井坂サンはオカルト好きらしく相当乗つてきており、自らやりたいとまで言い出した。それを聞いたサチは大喜び。私も少し、嬉しかった。嬉しいよりも、もっと、こう、醜い感情かもしれないが、それでも試すことが出来る。

その場ですぐに決まったのは、やる日。5月26日、水曜日だ。都合よく創立記念日で学校が休みなのだ。実行場所を探すのに手間取りそだと思つたが、それもすぐに決まった。井坂サンのお兄さ

んの家だ。お兄さんは大学生で、割と近場で一人暮らしをしているらしい。そこをもしかしたら、借りられるかもしないとのこと。早速井坂サンが交渉に掛かっている。

「結構、すんなり決まったね。井坂サン、超頼もしいわア」

帰り道に寄ったマックで、サチは満足気にエビフライレオを頬張りながら言った。

「人形とかこっちが用意しなきやかなーって思つてたけど、全然、ノリノリだね、井坂サン。昨日から色々調べてるらしーよ」

「ああ、うん…メールとか来た」

「あつ、愛んどこも？私のどこもー正直多すぎでうぜえ、けど、まあいつかー、みたいな？」

昨日から何か一つ分かる毎に、井坂サンは私たちにメールを送ってきた。日本酒を用意するとか、札を念のために用意しておく、だとか、何から何まで逐一。よっぽどオカルトが好きなんだらうと思つたが、サチの言うとおり、やつぱり少しつざい。と、言つた矢先に私とサチのケータイが光る。

▽差出人：井坂サン

「また来たし…あ、部屋オッケーらしーよ」

「マジで…うわ、ほんとだ」

▽本文：

▽兄ちゃんの部屋借りれた。  
▽高校のすぐ近くだよ。  
▽兄ちゃんは友達の家泊まるらしい。

「実行できるね、やつたー! だつてー。マジおもしろ」

「学校の近くかあ。なら、結構近いし、出れるなあ」

「えつ、来ないつもりだったのー? やめてよ、私と井坂サン一人きりとか無理だからー」

きやつきやと屈託なく笑う。本当に悪気がないのだろうか。

サチは返信する気がないらしく、そのままケー・タイを放った。なんだか井坂サンが氣の毒な氣がして、私が返信を打つておこうと思つた時だ。

「え?」

さつきまで3本立つていた電波が全部消えて、圏外になつたのだ。なんで、ここ、移動もしてないし…ちゃんと、電波入るはずなの

!」

「愛?」

携帯を軽く振つて電波を探してみると、サチが私を覗き込んできた。

「…電波が、なくなつた」

私がそう答えると、サチは一瞬固まつたが、すぐ口にしゃべと笑う。

「あー、愛。ほら、電波を通じてキちゃつたのかも?」

「ちよつ、マジ…脅かさないでよ。マジびびるからつ

「うふふー、いやいや[冗談だよ。愛のケータイ、ソフバンじゅん？電波の入り難さに定評のあるつて、よく愛が言つてんじゅん。もつ、びびりだなーかわいー」

いや、確かにソフトバンクはあんまり電波利かないけど、ここの中でも電波なくなつたことは一度も：いやいや、ない。ないわ。気にしたら、もっと悪くなるような気がして、私もケータイを放つた。返信は、また、打てばいいし。氷の溶けたアイスティーを、ストローでおもいつきり吸い上げた。

ソフトバンクを出るまで、私のケータイの電波は一本も立たなかつた。

## 5月25日02:55（火）

5月25日02:55（火）

そういうえば、ひとりかくれんぼやりたって拍手来てましたけど…そりやあ、もうね、自己責任で。ちなみに個人的には、あれよ、神経過敏状態になつてなんか幻聴が聞こえるんじやね？的な風に思いますお（キリッ）こういうオカルティックな話つてファンタジックとロマン！信じるかどうかは別として、夢のある話だなあとは個人的に思つています。つづ一訳で、夢は夢のまま、ロマンはロマンのまま、残しておいておいた方がいいんでね？つていうのが私の意見ですとだけ。

サチと私は、26日の夜中、2時にお互いの家を出る約束をした。私の親は怖いので、窓からそつと。サチの親は色々なことに寛大らしく、そんな必要はないらしい。2人で学校の前で落ち合つて、井坂サンのお兄さんの家の前に集合。ひとりかくれんぼ開始だ。

「なんかワクワクしてきたー！超楽しみ」

サチの機嫌はいいが、私は昨日のマックでの電波の件が気がかりで仕方なかつた。本当を言つと、夜も怖くて電気を消せなかつたほど。しかし私の神経は思つたよりも図太いのか、そのまま眠つてしまつていたけれども。

井坂サンはすでに準備万端なようで、今日は学校に、かくれんぼに使うぬいぐるみを持ってきて、私たちに見せた。小型のティベアだ。彼女が言つには、そのティベアは小さい時からの持ち物らしかつた。

「昔からの持ち物の方がハイリugiと思つんだよね」

彼女はそう笑つて、サチもそれはいいと褒めていたが、私はやはり氣味が悪かつた。

そのテディベアの綿を抜いて、米を入れて、赤い糸を巻きつけて、刺す。現物を前にすると、妙にかわいそうになる。それでも彼女らは楽しそうだ。この温度差が、更に氣味を悪くさせている。とは思うものの、なんだかんだで興味のある私。止める氣は、なかつた。何か起こつても、そうよね、唆したのはサチだし、やるのは、井坂サンだし。私は性格が悪いのだろうか。

井坂サンはテディベアともつ一つ、携帯の画面を私に見せてきた。

「何これ」

「で、後ね、2ちゃん見つけたの。現行スレ。僕、こじりついでに実況するよ」

そこはサイトで見たような書き込みがなされている。私とサチはいまいち分からぬ。

「実況つて、あの、まとめサイトで見たみたいな?」

「うん、写メとかアップして、リアルタイムで見るみたいな。そうしたら、君たちも確認できるし、検証例も増えるし。ビデオカメラも借りられたから、動画も撮つて二〇二〇に上げようと思つ」

井坂サンは他にも色々言つていたが、サチも私は、やはりよく分からなかつた。私たちが首を傾げ続いているのを見兼ねてか、井坂サンは、とりあえずここ見ておけば自分の状況が分かるからと見て、私とサチにメールでそれのURLを送つてくれた。

「セレニの時くらいから色々書き込む。ナナつて名前でやるから」

まあよく分からないけれど、とりあえず、井坂サンがナナつて名前で、それでここを見ておけばいいらしい。サチは説明が長いためか、飽きてしまったようで、私の服の袖を引いて帰りたがった。

「分かったよ。オッケー、じゃあ、また2時に!」

そう言つて、なんだかよく分からぬ説明から逃げた。  
途中すぐにサチが私に囁いた。

「うわ、超オタクだね、やつぱ。きも」

「でもやらせるんでしょう?」

「まあーそーだけどー。終わつたらそつこー縁切り。今私たちのこ  
と、仲間とか思つてんのかな?気持ちわるつ」

サチは面白そうに笑つた。私は、そうだね、と控えめに笑つた。

サチは、怖い。

5月26日 01:11 (水)

5月26日 01:11 (水)  
今日はカラオケオールです！つかさつきまで確かにリア充と飲んでたんだけど、カラオケに行つたらリア充が迷子ｗｗｗｗアニソン歌いすぎｗｗｗさつきの恋バナ（笑）してたお前らはどこに行つたのｗｗｗでも私はそんなお前らが大好きだずｗｗｗ明日、大学間に会つかしり下りキドキ。ところでジョイサウンドはボカロが入つてて…

ブログを読みながら、暗い道を歩いた。外は思つたほど寒くない、むしろ暑いくらい。薄いパーカを羽織つて出てきたけれど、いらなかつた。私の家から歩いて20分ほどのところにコンビニがある。歩いていくとコンビニの前に、サチを見つけた。サチは何やら携帯を覗き込んでいる。

「サーチ？」  
「うわはは、つて愛じやんー・マジびっくりさせないでつてのー。」  
「ごめんごめん」  
「てか、あれ、見た?つちやん、送られてきたヤツ」  
「え、見てない」  
「見てみ、見てみ」

そう言つて、サチは私に携帯を貸してくれた。サチは、待つている間のお菓子を買ってくると私に言い残して、コンビニ入つてしまつた。残された私は、サチの携帯からつちやんを見た。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
177 2010/05/26 (水) 02:13:48 ID:  
y s f o L w i H O

名前：ナナ uD J1 r K O a r o  
今日、ひとりかくれんぼをやります。

スペック：

K県在住、17歳、女

靈感はあるから、結構何が起きても対処できます。

人形：テディベア（年代物）

中身：米と髪

名前：チコ

隠れる場所：押入れ

刃物：カッター

爪は願掛けで伸ばしてるので、髪にしました。  
それ以外はテンプレ通りのことをします。

部屋にデジカメ設置もしました。

一応、友人が部屋の外で待機しています。

3時ジャストから開始します。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

179 2010/05/26 (水) 02:36:46 ID:  
k + A o i T k t o

名前：

勇者 k t k r ! 17とかJK WWW

無理をしないように気をつけてな

180 2010/05/26 (水)

02・37・12 ID :

Eat a p f a r o

名前 :

自称霊能力者さんは心強いですね><  
頑張つてください><

ナナは多分、ナナのことらしく。その後も、ぞくぞくとレスポンスがついていた。

なるほど。身内だけじゃなくて、ここに書き込めば他の人とも共有ができるのか。そしてこれもログに乗るのかな？

「ね、すごいよね。なんか面白くなってきたー。」

「コンビニから出てきたサチは、私が携帯にかじりついているのを見てにやにやと笑った。

それから、私とサチは貰った地図を頼りに井坂サンのお兄さんの家に向かった。コンビニの近くのアパートで、すぐに見つかった。井坂サンがアパートの前に立っていたのだ。

「やつほー、井坂サンー、サイト見たよーすじこねー。」  
「うん…まあ…うん、ついてきてよ」

井坂さんは携帯をずっと俯きながらガチャガチャ打つていて、こちらを向かない。俯いて携帯を弄る彼女はまるで、貞子そのものだ。

髪の毛を縛ればいいのに。

井坂さんのお兄さんの部屋は3階の角部屋、301号室だった。

「いじつて、レオパ？」

「うん… そう」

「マジ？ 壁薄いんでしょ？」

「わかんないけど… そつかも…」

井坂さんは、相変わらず携帯に何かを打ち込んでいた。きっと2ちゃんに何か書いているんだろう。私たちは、井坂さんのお兄さんの家には上がらずに、玄関先で待つていうよう言われた。そうしてすぐに、井坂さんがドアから顔をだし、私たちに500//つのペットボトル2本を渡した。今度は携帯をいじつていなかった。

「念のため、君たちにも塩水。僕は大丈夫だけど、君たちに何かあると悪いから。一応、鍵は開けておく。5時には終了させるし、助けて欲しい時にはケータイで呼ぶし…。中は、2ちゃん見てて」「ねえ、もうやんの？」

「ただけど」

「やる前に人形見せてよー」

サチがらんらんとした目で頬むと、井坂サンは部屋に戻り、部屋から人形を取つて來た。もう、すでに術が施されているのか、愛らしいティディベアには赤い糸が巻きつけられていた。それ以外は、何の変哲もないティディベア。

「これ、お米入つてるんだ？」

「いた」

「縫い目が綺麗だねえ。お裁縫上手なんだ」

私がなんとなくそういうと、井坂さんは照れたように顔を隠す。嬉しかったのかな？よく、分からぬけれど。

「じゃあ、僕は3時ジャストにほじめるから。よろしく  
「任せてよー」

それから、井坂サンはドアを閉める。私たちは、部屋の前の廊下に腰を下ろし、コンビニで買ったお菓子の袋を開けた。

「つていうか塩水とか、用意万端だね」  
「マジうけるし。まあ、部屋の外にいるし、大丈夫っしょ。それより2ちゃん見てよーよー」

ケータイを開けると2時52分だった。もつすぐ本当に始まる。が、しかし、また…

「…ねえ、また私、圏外なんだけど…」

おかしい、コンビニの前までは確かに電波があったのに。そくつと寒気がしたが、サチがは私のケータイを覗き込んで笑った。

「ちょっと、マジじゃん！ソフトバンク仕事してよー。」「ねえ、ちょっと怖くない…？」  
「愛のソフバンの電波逃亡はいつもじゃん。いいよ、私の一緒に見  
よーよー！」

いや、確かによく電波が入らなくなるけど、こんなに頻繁にはならないよ…！

しかし、サチは私の前に携帯を突き出してくる。

名前：ナナ UDJI「KO a r o  
少し早いけど、今から始めます。  
写メは添付しました。

あと、友人にも一応塩水を預けておきます。

名前：  
おk。俺も一応K県に住んでるから、  
何かあつたら行くわwww  
べ、別にJKと出会いたい訳じやないんだからねー！

名前：  
気をつけてなー。  
<<205

見える、俺には見えるぞ…！  
お前の下心がなー！最低だぞ！

203 2010/05/26(水) 02:58:09 ID:  
y s f o L w i H o

205 2010/05/26(水) 02:58:09 ID:  
t a p a j v 9 t o

208 2010/05/26(水) 02:59:02 ID:  
j o 2 f v 0 8 f o

仕方ない、心配だから俺も行く。

k+A o i T k t O  
2 1 2 2 0 1 0 / 0 5 / 2 6 (水)  
0 3 : 0 0 : 2 8 I D :

お前らWWWWWW

213 2010/05/26 (水) 03:02:56 I.D.:

名前：ナナ uDjlrrKOar o  
やつてきました。

ぐせつてやつた瞬間、寒気がした。  
今、おしいれに隠れています。

「井坂サン、やつたみたい  
「まじで」

サチはポツキーをもぐもぐと食べながら、私と二人で携帯を見た。

「じゃあ、今中に何かいるんだ？」

「た...ため..」

「ちよつ、ひかる」

怖いとは言うものの、サチは楽しんでいる風にしか見えない。それに、掲示板に書き込んでいる人も。しかし、私も実感はなかなかわかれない。

名前：

テレビは何つてるの？

名前：ナナ uDJIrKO aro

221

適當なものがなかつたので、借りてきたアニメのDVDです。

今、物音したかも？

よく分かりません。

今のところ、何もなしです。

「ちょっと、何してるのサチ！」

サチは10分も惜しいようだった。  
少しむくれていたが、何を思ったのか、べったりとドアに張り付いて、ドアのノックした。

「10分経ったけど、何もないね。つまんない」「まあ、他の人もすぐになんて怒らなかつたよ?」

やつぱり、今のところ何もありません。  
一応、お札も自作してます。  
ぱっちりです。

名前：ナナ uDJ1rKOar0  
<<205  
y s f o l w i H o  
228 2010/05/26 (水)  
03:10:21 ID:

ルパン見てるのかww怖さが半減ww  
塩水忘れてないだろ?」

名前：  
226 2010/05/26 (水) 03:08:32 ID:  
t a p a . j \ 9 t 0

「何か物音したとか書いてくれるかなって思つて」

「いやいや、笑しながら、トントントン、トントントン、ヒヂアを叩いた。

「あなたが、せ」

「いじやん、大丈夫だつて！」

231  
2010/05/26 (水)  
03:12:56  
I D :

名前：ナナ uDJ1rKOar0

音が聞こえてきた

テヘンテヘン、テヘンテヘンヒ。

三回目は、寒くなってきた

それは、案の定、掲示板に書き込まれていた。  
その書き込みを見ていた人たちも一斉にそれに返信する。

「マジカルナーチ」

サチは笑いながらドアを叩く作業を続けていた。

「ちよつ、やめた方がいいって」

私は止めたが、サチはやめない。

j o 2 f v o 8 f 0 2 3 5 2 0 1 0 / 0 5 / 2 6 (水) 0 3 : 1 4 : 1 4 I D :

名前：  
来たな。

どんな音？何か叩いてる感じ？

-  
2 - -  
4 - -  
1 - -  
-  
2 - -  
0 - -  
1 - -  
0 - -  
/ - -  
0 - -  
5 - -  
/ - -  
2 - -  
6 - -  
(水) - -  
-  
0 - -  
3 - -  
: - -  
1 - -  
6 - -  
: - -  
0 - -  
1 - -  
-  
I - -  
D - -  
:

名前：ナナ uDJKaroro

ほんと」「ノックしてる感じかな。  
音がだんだん近づいてくる。

最初は遠かつたのに、

Eat a p f a r o 244 2010/05/26 (水) 03:17:48 I D :

名前：  
探してゐるって感じだな。

## どんな感じの靈か分かる？

249 - - -  
2010/05/26 (水) - - -  
03:20:13 I.D.:

yes for the win

名前 : カナ uDjl nKO ar0

多分、人？

弱すぎてよくわからない!

大人じゃないです、子供かな。

テレビはまだ異常なし。

- - - - -

書き込みを見た瞬間で、私は思わず噴出した。初めて井坂サン

会った時の、あのイタさが蘇る。

鳴らしてゐる、サチなのに。子供の靈つて。

卷之三

「あのね、井坂サンがね、その音は子供だつて言つてゐるの」

「ちよつ、マジで？ やべー、私死人になつちやつてんじやん。」

か疲れたー

そう言って、サチはノックをやめた。

ノックして脅かそうなんてひどい、とは最初思つたけれど、井坂サンともどっちもどっちだらう。

私は私のケータイを見るが、相変わらず電波が入ってない。画面の左上は相変わらず、圏外。

しかし、異変は突如、2ちゃんねるで起つた。

名前：ナナ uDJ1rKOar0

テレビ消えた

## 多分テーブル。

5月26日 03:24 (水)

しかし、サチはもうドアなど呑いていないのだ。私の隣でポカリを飲んでいる。

「え、なに、何かあつた?」

「うん……テレビ、消えたつて」

「マジー?」

サチは私の責めた様子を見て、ペットボトルの蓋をきゅっと締めて、私から携帯を取り上げた。すぐさま井坂サンの書き込みを見つけると、『あやまはと笑う。

「マジ、うけるんだけどーねえ、ドアから音聞こえるかな?」

「ノックの音?」

「レオパ壁薄いって聞ひじやん?聞こえるかもよー。」

サチはやう言つて301号室のドアに耳をくつつけた。私も思わず、ドアを耳に近づける。が、音は何も聞こえない。

「聞こえなくない?」

「うん。井坂サンの幻聴じゃないかな……狭いところにいるし、緊張してるだろ?」

「でも子供なんでしょうマジうけるからア」

きやつさやと笑うサチ、私は再びケータイでさやんねるを見た。サチも覗き込んでくる。

名前：  
k+A o.i T k t O  
2 6 1 2 0 1 0 / 0 5 / 2 6 (水)  
0 3 · 2 6 · 2 8 I D  
もう何かきてるってことか。  
さつきの子供?

多分そうだと思います。

ysfolwiH0

七  
七

子供じゃない、女

ちがう、2人以上いる

部屋動かさない

音響回路

をかじてる?

258

201

3 / 05

26 (水)

03

30

2  
9

ID:

ysfOLwiHO

名前：ナナ uDjJ1rKOaro

こわい気持ち悪い

名前  
・

落ち着け。  
無理すんな。

駄目だと思ったら、塩水口に含んで外出で手順通りに終わらせん。

「わか、んない……」

何が起こっているかなんてわからない。ドア一枚隔てた部屋の中、流石に聞き耳を立てる勇気はない。

嘘かもしない。だって、井坂サンだよ？中二病だし…本当かな  
んて、分からぬ。それでも、恐ろしいくらい寒気がした。さすが  
のサチも、顔が凍りついている。

「どうしたの……？」

ysf o l w i H o 272 2010/05/26(水) 03:36:38 ID:...

なになりゆきせぬか、おぐ

自称霊能力者さん頑張つて下さいvv  
念力で吹つ飛ばしてくださいvv

E a t a p f a r o

269 2010/05/26 (水)  
03:34:42 ID:

どういう風に携帯がおかしいんだ？

名前  
：

9 + A 0 ii T < t 0

2  
5  
5  
2  
0  
1  
0  
0  
0  
5  
1  
2  
5  
(  
0  
3  
:  
3  
3  
:  
2  
3  
0  
0

ケータイおかしい

Y  
S  
f  
C  
L  
W  
i  
H  
C

264

0  
3  
:  
3  
2  
:  
3  
6  
9  
  
II  
0  
:

名前：ナナ uDJKlarkOaroro

562 ^ ^

表示が圈外になつてゐ  
ナビ、ネットつながつてゐ

四庫全書

2 - -  
7 - -  
3 - -  
2 - -  
0 - -  
1 - -  
0 - -  
/ - -  
0 - -  
5 - -  
/ - -  
2 - -  
6 - -  
(冰) - -  
  
0 - -  
3 - -  
: - -  
3 - -  
1 - -  
: - -  
3 - -  
2 - -  
  
II - -  
D - -  
: - -

tapajv9t0

名前

巻外なのに繋がってる?

もしかして、別の靈的な電波を介して、とか？

## 名前

۲۷۳

勇者怖からせんなよバカ

ナナ

もうやめた方がいい  
すぐやめな

「圈外とか…愛のも、だよね？」  
「うん…何か…でも…この前から、なんか、調子悪かつたし…！」

「うん…何か…でも！この前かこ

調子悪かつたし……！」

サチが私のポケットの中のケータイを見る。もしかして、もしかしたら、とは思っていたけれど、それがこのおかしな遊びのせいだとは思う気がしなくて、そう思う勇気もなくて……それなのに、その井坂サンの書き込みが、私の嫌な予感を刺激する。

私はそつと、パークーのポケットの中のケータイを取り出して、画面を見た。すると、

「あれ……？」

電源ボタンを何度も押す、押す。押す、けれど、おかしい、なんでなんで、さつきまで確かに、

「ケータイ……電源が落ちてる……」

284 2010/05/26 (水)  
03:38:44 ID: 033844  
y s f o l w i H o

名前：ナナ uDj1rkOaro

## みつかつた

ほぼ同時に、井坂サンは”見つかった”という書き込みがある。私のケータイの電源は入らない。私とサチはほぼパニック状態に陥っていた。

「どうしよう、どうするーー？」

「そんな…」

「怖いーもう行こうよーー」

サチが立ち上がり、私の腕を引いた。

私ももう逃げ出したかった。心の奥で、何かあつて欲しいと願っていた。そういうのはきっと、きっと、何も起こらないだろう、という予想。しかし、起こってしまった何か。井坂サンの書き込みを見ただけでは、これほどのパニックにならなかつたのかもしれない。狂言かもしれない。そう思えば、まだ正氣でいられたかもしない。しかし、いきなり落ちてしまつた私のケータイの電源。故障かもしれない。けれど、たつたそれだけのことが今はとてつもない恐怖感を沸き起こす。

「ちよつ…でも、井坂サンは」

「井坂なんてどうでもいいじゃんーやばいから、マジやばいから、立つて！」

「サチ、落ちつこうよ」

「落ち着いてらんないからーおかしいしーきもーー」

「あんまり騒ぐと隣の人…落ち着いて！」

その恐怖感とサチとは裏腹に、私は落ち着いていた。サチの両腕を捕まえて、少しだけ声を荒げた。

落ち着いて、と言い聞かせていたのはサチではなく、自分に、かもしれない。サチは、私が大声を出すと、驚いたようにその場に固まつた。落ち着け、落ち着いて…。強くサチの目を見つめると、サチは暫くしてすとんとその場に崩れた。

「…どうするの…ってか、何もできないしょ…」

「取り合えず、2ちゃん見てよつ。逃げるとか、絶対…後味悪いし、何かあつたら…」

「どうすんだよ…やっぱいつでば…」

私は、電源の入らない私自身のケータイはさておき、サチのケータイを再びリロードした。

285 2010/05/26 (水) 03:39:51 ID:  
t a p a . j \ 9 t 0

名前 :

見つかつた? もうじやあやめる。大丈夫か?

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

288 2010/05/26 (水) 03:40:42 ID:

y s f o l w i H o

名前 : ナナ u D J 1 r K O a r o

部屋に女がいる

こつちみてる

見つかつてる

Eat a p f a r o	名前 :	だからやめろつていつてんだろ 釣りならやめろよ つまんねーから	296	2010 / 05 / 26 (水)	03 : 43 : 16	I D
D : y s f o L w i H o	名前 :	ナナ u D J l r K O a r o	298	2010 / 05 / 26 (水)	03 : 44 : 12	I
<< 296						
		釣りじゃないです！				
		怖い、どうしていいかわからない どうしたらしい				
		動けない				
		出れない				
tapajv9t0			301	2010 / 05 / 26 (水)	03 : 45 : 22	I D
名前 :						
子供いなくなつた?						
部屋の外に友達いるんだろう?						
とりあえず、そいつらに連絡して。						
とにかくナナは落ち着け。						

ひつひつ  
ひ

296 2010/05/26 (水) 03:46:11 I.D.:

前言：

落ち着け

怖くても人形に塩水をかけない限り、  
終わらないんだぞ。

勇氣を出して終わらせにいける

逸る心臓。ドクドク、ドクドク、と脈打つにつねや。心なしか、息も上がってきた。

「連絡来るかも」

「やだ！私のケータイじゃん！」

サチが私の手からケータイを取り上げる。私が声を上げるよりも先に、サチが自らケータイの電源を切つて、立ち上がる。

「サチ！」

「もう無理！意味わかんない！帰ろうよ・ううん、愛が帰らなくて

も私帰るし！」

「待つてよー。2ちゃん見てなきゃ分かんないじゃん！」

「なんで…？ もうどうでもいいじゃん…怖いから、もう嫌…帰る…」

「井坂さんは！ 井坂さんはどうするの…」

私が叫ぶも、サチは持ってきた白いバックにまだ封を開けてないお菓子やら飲み物をひとつと入れてしまつ。

「井坂とかどーでもいいから…あいつがミスったのが悪いんでしょう！」

そう言って、サチは早々にその場から立ち去りました。  
その時だった。

トン、トントン…  
トン…トン、トン…

微かに、背後から…背後のドアから音がした。

それは、まるで内側からそのドアをノックするような…。

「ひつ…」

サチが声を上げた瞬間、腰を抜かしていた。大きくしりもちをついた瞬間、サチのバックから、ケータイが落ちた。

そして、その落ちたケータイの画面がふいにぱつと付いたのだ。  
そして、バイブ音、メール着信…差出人は、井坂ななみ。

「なに、これ…」

「い、意味わかんない… さ、さつき電源落としたはずなのに、なん  
で、」

着信を表すライトがピカピカと赤く光っている。

サチはケータイを拾えずに、しりもちをついたままだ。

トンントントン…  
トンントントン…

ドアを叩く音、メール着信。

怖い、怖い怖い怖い…怖い。私はそつと、サチのケータイに手を伸ばした。サチはもう、何も言わない。うつすらと涙を浮かべている。私は、新着メールを開いた。差出人は確かに、井坂サンから。さつきの掲示板を見たとおり、私たちへのヘルプかもしれない。そつと、受信箱を開けた。携帯を握った手のひらが汗ばみ、親指が震えた。

差出人：井坂ななみ

件名：Re：

05/26 03:48

あけて  
みつかつた  
すぐ

「開けてって…、開けてっていってる…」  
「開ける!…? ドアを、何で!…?」

おかしい。ドアは開けておくれて井坂サン自身が言っていたはず。なのに、開けて? もしかして、開かなくなっている? ドアが、開かない?

「ドアが、開かない? もしかして、ノックしてのって、井坂サン?」

はつと氣づいて、私はドアへ駆け寄った。恐怖と好奇心と責任感とで、私の中はぐちゃぐちゃだ。私はドアに声を大きく声を掛けた。夜中だらうが、もつこの際関係なかつた。

「井坂サン？井坂サン！聞いじやる？もしかして、ノックしてんのつて、井坂さん？答えて！」

私は声を上げてすぐに、ドアに耳をくつつけた。すると、ノックの振動の中に、微かな音を聞き取る。

…けて…け、て…開け、て…

その音は、その声は確かに井坂さん。恐怖におびえたようなその声に、私はサチに呼びかける。

「やつぱ井坂サンだよ！開けてつて、開けてつていつてる…ノックも井坂さんだよ！」

「はあ…？い、いや！何で、何で開けなきやなの…？かくれんぼの最中にあけたら、駄目つて、書いてあつたじやん！」

サチは私に形相を変えて怒鳴る。確かに、かくれんぼの最中に外出ることは厳禁と書いてある。過去に外に出た人も、何らかのトラブルに見舞われている。

「でも開けてつて言つてる！」

「開けたら駄目に決まつてんじやん！」

「いつ…井坂サン！かくれんぼは！？かくれんぼは終わらせたの…？」

埒が明かない。私がドアの向いの井坂さんに呼びかけて、また

『ア』に耳を聴いてみたとした時だつた。

ドン・ドン・ドン・ドン・ドン・  
ドン、ドン・ドン・

あさまじこ音と共に、井坂さんの悲鳴。

『開けて…あけ…あけてよ…お願い、開けて…』

その必死の声に思わず背筋が震えた。今まで聞いたことのない声、必死にドアを叩き、ドアを開けてと助けを求める声。私はそこで、今までかつて味わったことのない恐怖感に襲われた。一揆に固まるからだ、嫌な汗が背中に吹き出た。思わず、後ずさつた…が、すぐには、今度はサチが動いた。

「ちょっ、サチ…」  
「ダメー出しゅや、ダメー」

もう戻んで、強く301号室のドアを押さつけたのだ。

「サチ、それじゃ、井坂サンが…」  
「駄目に決まつてんじやん…ー出したら駄目ー…」  
「かわいそつだよー」  
「殺されてもいいのー?」  
「ー」殺されるつて  
「早く、いいから愛も押さえて…押さえりー」

サチは今までに見せたことのない形相で私に命令した。が、私にはどうしたらいいか分からぬ。

『開けて、開けて、おねがい…あけて。ぼく、嘘ついてました。ほんとうにじめんなさい。本当は幽靈とか見えないです、靈感もないです、見えるフリしてただけ、ほんと、じめんなさい、あやまるから、こくらでもあやまるからほんとうにじめんなさいゆるしてください…あけてくださいここからだして、ほんと、あけて…開けて、開けて…！開けて、開けて、おねがい…あけて。ぼく、嘘ついてました。ほんとうにじめんなさい。開けて、開けて、おねがい…あけて。ぼく、嘘ついてほんとうにじめんなさい。開けて、開けて、おねがい…あけて。ぼく、嘘ついてました。ほんとうにじめんなさい。開けて、開けて、おねがいあけてえ…』

ドアの向いでは、井坂サンが開けてと囁く。ノックの音が悲痛だ。

「サチ、開けてあげよつよ  
「開けたら…あけたらだめだつてんでしょう…」

サチは私にすじこ形相で迫る。私はその迫力に勝てず、私もおずおずとドアを押された。  
ドアに体を密着させる。ドンドン…ドンドン…その振動と共に、

別の振動も感じた。なんだこの振動、変な、滑るみたいな、ひつかくような…ひつかく?

『開けて開けて開けて開けて開けて開けて…』

井坂サンの悲鳴が聞こえる。気分が悪くなってきた。何か独特的の気持ち悪さ。がんがんと響く、ノック、開けてとせがむ声。その時だつた。ポケットに入れたサチの携帯のバイブが鳴った。私は片手でドアを押さえ、右手でサチのケータイをポケットから引っ張り出した。

音声着信  
井坂ななみ

井坂サンから電話が…そう、サチに言ひ間もなく、ケータイはすぐに入つてしまつた。なんで、私まだ何も操作していないのに…あまりのことに小さく悲鳴をあげて、そのケータイを落としてしまう。すると、そこからも音、声、井坂サンの声が聞こえる。井坂サンの声が、声が、声がドアの境とケータイから井坂サンの声が、声が声が二重に響いて響いて響いて声が響いて声が、声が。



あけてあけてあけてあけてあけてあけてあけ…開いた』

アがゅっくりと開く。音が止む。体の力が抜けていく。ギイ、と重苦しい音を立ててド

サチが、崩れ落ちた私の顔を見て、にたり、と笑った。

「ミツケタ」

5月27日 00:09 (木)

5月27日 00:09 (木)

ただいまでじんす。案の定大学遅刻したwwふざやーふざやーーで  
もオール超楽しかった!わたしリア充すぎるね!

で、さつき家帰ってきたんだけど、何か超汚ねえんだけどww家の  
前から超汚い。お菓子の袋とかマジぱねえ。「」だらけなんだけど。  
マジ、妹に部屋貸したんだけどね…もつ貸さん…許さん…!私の「」  
ミ屋敷を更に「」屋敷にいやがつて…。高校生こわい。ところで、  
部屋ん中生くわいんだけど、なんで?

携帯のアラーム音がうるさい。まだ眠い…と、枕に顔を押し付けたまま手探りで携帯を探し当てる。眠い、まだ眠い…ところで今何時。僅かな理性で目を開けて大きな携帯のサブディスプレイを見る。うん、ばっちり目が覚めた。目が覚めただけならまだいい、心臓が口から飛び出た。やばい、遅刻する。起こられる。今度こそ単位やべえよ。

一段ベッドからソッコー飛び降りて顔を洗いに風呂場に走ると、風呂場の洗面台から昨夜戻ってきたときから続く生臭さが鼻についた。

先日、妹に部屋を貸したのだ。俺はその日はちよつと友達のカラオケの予定だつたから、普通に貸してしまった。けれど、今は少し後悔している。そうだ、貸す前に俺もちょっとと考えれば良かつたんだよな。理由を尋ねたら、友達とお泊り会をしたいという。へえそうじゃあいいですよ、と快く明け渡したが、よくよく考えればお泊り会は実家でやればよくね?と気づいたのは時すでに遅し、俺が家に帰つてきてからなのだ。妹は17歳、まあ、年頃ですよね。年頃の娘が部屋借りたいって言ってね、うん、油断をしていたね、俺は。帰つてきたらこの生臭さですよ、すぐにピンと来て怒りのメールを妹に送つたけれど、当然の如く返信はなかつた。ですよねー、ラブホ代わりに使つちゃつたとか、言えませんよねー。

夜中に生まれた行き場のない怒りは、今朝になるとすっかりと冷え込んでいた。落胆のため息しか出ない。そのままに、冷たい水で顔を洗う。髭も剃つて、石鹼を落とす。全て洗い終えた後、綺麗に剃れたか鏡を見る。

「うーん、いい男」

自分で咳いてにやにやした。俺以外にこれは誰も言ひてくれないのだ。

暫く髭の剃り残しチェックをしていると、ふと、鏡の中に違和感を感じた。鏡がやたら黒っぽいのだ。汚れか？と思つて指を鏡に滑らせるけれども、消えない。いつの間にか黒ずんだ鏡を不審に思いつつ、風呂場を後にした時であった。ふと排水溝に目をやると、無数の黒い髪が詰まっていた。はあ、ともう一つため息を吐き、風呂場を出た。やる前の身支度も俺の家かよ、ガチラブホか、勘弁しろよ。部屋着のTシャツを脱ぎ捨てた。

「おはよー」

ぎりぎりながらも授業の部屋につくと、すでに友人の今井が一番後ろに席を取つていた。

その隣の席に座り、今井に声を掛けるが今井はドンシカト。恐らく機嫌が悪いんだろう、俺などに目もくれず、無表情で本を読んでいる。機嫌が悪いところは絶対に俺と話してはくれないのだ。こういう時は、俺が何を話しかけても俺の独り言に終わってしまうので、機嫌が自然に治るまでなるべく話しかけないようにしよう、と苦笑いを浮かべて鞄を床に置いた時だった。

「…君、昨日やたらひるなかつたよね？」

今井の方が先に口を開いてくれたことに、驚く。が、恐らくこれは機嫌が治つたんでもなんでもなくて、恐らく、俺に文句を言つためだけに口を開いたんだろう。そしてその節も思い当たる。今井は俺の部屋のすぐ隣の部屋の住人なのだ。

「あー…うーん…そう、だつたのか?」  
「キャー キャー うるさかった」  
「…キャー キャー 言つてたのか…」  
「…君じやなかつたの」  
「おめー俺はキャー キャー 言わねーよ」  
「は? ちげーよ…はい? 君は昨日家にいなかつたの?」  
「あー…そう、妹に部屋貸してたんだ」

「ラブホ代わりにされたんですよ…と小ねく付け加えると、今井はにやっと笑つた。

「えまあ。で?妹は乱交でもしてたの」「はー?」「すつつじこじつるさかつた。あれは女2、3人いたね」「ま、マジでか…もうやだ…高校生の性は乱れてるな…」「井坂くんはもうちよつと色々考えてから行動した方がいいと思います」

もう色々ぼろぼろだ。妹の貞操が、というのも勿論、いや、俺は妹の云々に口出す気はないけれども、部屋をラブホ代わりに使われたとか、お兄ちゃんのライフはゼロですよ。

頃垂れた俺には、今井がぼそりと言つた言葉は聞き取れなかつた。

「まあ、4時頃にはピタリと止んで、もの音一つしなかつたんだけ

どね

ななみ、  
許さん…。

5月28日 02:42 (金)

5月28日 02:42 (金)

今日は会計さんの家で楽しくマリカーをしているよ。私ゲームやらないんで全然歯が絶たないぞぐきぎぎぎ…ひどい！ひどいわ！もうちょっと手加減してくれたつていいのにッ！マリカーは64時代は知ってるんだかなあ…無理。この人初心者相手に鬼畜すぎです。もう嫌です。ううう…。

パチンと携帯を閉めると、会計さん」と今井志紀くんが俺をじト目で見ていた。

「君まだネカマブログ続けるわけ  
「続ける続ける。もつ日課だね」  
「いつ釣り宣言するの」  
「分からん、当分考えてない」

チューハイを「ぐりと飲み干して、カンを勢いよく机に置いた。このブログは、最初は真面目な映画レビュー・ブログだつたのだ。真面目に書こうと思うあまり、一人称が「私」。ようやく人が着始めてにぎやかになつてきた頃には、「私」との一人称で俺は女だと思われているらしかつた。それを知つてからはわざと女っぽく書いたりしていったが、もう最近はフリーダム。好きなことを好きなように書いている、が、未だに男だとはバレていないし、それで困ることもなかつた。

「会計さんが男ですって言つたらみんなショックだらうなあ」

「君のと同時にバラせばB-Lガチムチ！つて騒がれるかもな。絶対

嫌だからさつやと誤解を解いてね

「ひどい！」

今井の住む302号室で、俺たちはひたすら雑談をしながらマッカーをしていた。ブログに書いた通り、俺はゲーム関連はひどくへたくそだけれども、負けん気が強いのでひたすら今井に挑んでいた。

「で、妹さんの返信はきたの？」

「いや、音沙汰なしだよおおおお、ばか！甲羅やめろばか！」

「やまあ。ふーん、しかしごーな、今時の女子高生は」

「そりだなあ。妹はおふくろ似で割と可愛い顔してつからなー…モテ…ぬいづらう！赤甲羅やめろよ！」

「君の妹だとは思えないね。君の方が捨て子だつたの」

「実子です！まあ、友達もたくさんいるみてーなことも言ってたし、モテるとも言ってたし…まあなあ…でもなあ…お兄ちゃんは複雑ですよ」

「心配だつたら、実家に電話すれば？確実じやん」

「それが出来たら苦労はしませんよ…お前が俺にピンポイント攻撃してこなきやこんな苦労もしねーしな…」

そうなのだ。それが出来れば俺だつてさうと実家に電話なり何なりしているのだ。

俺は、只今絶賛勘当中なのだ。といつのも言葉だけかもしれない。勘当の理由は至つてシンプル。行きたい進路があつたが、親父に反対されたのだ。そんなに言つなら受験費・学費全部自分で工面しろ、と言われた高校3年生の冬。ここでもまた負けん気の強さで、頑張つた。受験費用はバイトをしながら蓄え、1年生分の学費は祖父に頭を地面に擦り付けて頼んだのだ。祖父も最初は反対していたが、俺の懸命さに答えてくれ、俺の味方になつてくれたのだ。実費で大学受験をし、学費も一応は揃え、これで親父も認めるかと思つたら

大間違い。親父は俺を勘当だ！と怒鳴ったのだ。家をいきなり追い出され、そこから家庭内は一気に険悪に。俺も言われるままに家を出たが、すぐに祖父にそれが知れ、今の住居に住まわせて貰うことになった。レオパレス21、年間実質…これは伏せておこう。もつと安アパートでも良かつたのだけれども。

今はバイトをしながら祖父に金を返しつつ、教師へなるべき日々勉強…ときどき遊び。家には絶対に寄り付かない。というのも男の意地だ。強がりとも言う。

そういう訳で、実家とは連絡が取れないので。母親はたまに家電でかけてくるし、妹はし�ょっちゅうメールを交わしていたから別にいいのだけれども、こちらから連絡はとてもじゃないが出来ないのだ。

俺が言葉を口ごりせている間に、今井はゴールをしており、散々今井から攻撃を食らった俺は最下位になっていた。もうやめたー、無理ーとWi-Fiハンドルを投げ出そうと思つたその時だった。

トントン、トン…

小さな物音が俺の耳に入った。  
何かを叩くような音だ。

「あれ、もしかして誰か来た？」  
「はあ？」  
「ノック聞こえた気がする」

「『仮のせこじやね』

少しあくつよく聞こえなかつた。ゲームの音か?と、リモコンでゲームの音量を下げるとい、その音はより鮮明に聞こえてくる。

トントン、トントン、  
トントン、トントン、

今井と顔を見合わせる。今井は首を傾げていた。やはりノックの音がする。しかし、そのノックは302号室のドアからの音ではない。もつと遠い。

「君ん家じやね?」  
「俺ん家?密か?ドロボウ?」  
「ドロボウはノックしねーだらう  
「なるほど」  
「もしくは昨日の...」  
「それだったら昨日の分の料金を頂きたいです

よつこしよ、ヒ立つ上がつて持つてきた上着を手に持つた。

「じやあ、ついで、俺帰るわ

「おひ。帰れ帰れ

トントン、トントン、  
トントン、トントン、

「はいはい、分かつたよ。今行きますよ。じゃあなー」

「あ…おい、井坂」

「はい?」

302号室のドアを出ようとした途端、今井が声をかけてきた。珍しい、普段は見送りもしないのに。今井は何か言いたげにして、俺はそれを待っていたが、とうとう何も言わずに部屋に戻ってしまった。

「おおい、なんだよ!」

今井は振り返らずに、そのまま見えなくなってしまった。恐るべく口フトに上がってしまったのだろう。なんだつつの。俺はそのまま302号室を出た。

そしてその301号室のドアの前に人…あれ?

トントントン…  
トントン…ト…

あれ、誰もいない…?

おかしなことに、ドアの前には誰もいなかった。  
てつ生きり誰か尋ねてきたものだと思ったのに。

トントン、トントン、  
トントン、トントン、

しかし、音は確かに聞こえる。それも、俺の部屋からだ。なんで?  
ここで俺は初めて恐怖を知つて、302号室に再度飛び込んだ。

「今井ッ！」

大きな声で今井を呼ぶ。今井が玄関に来るのも待つていられなくて、俺は健康サンダルを脱いで今井の部屋に上がる。今井は面倒そうに身を起こした。

「……どうしたの、帰るんじゃないの」

「帰るうと思つたら……違う、ノックの音、密じゃない。部屋の中から聞こえる……！鍵かけてんのに！」

「……」

「なあ、これ警察だよな？警察呼ぶべきだよな

「だから、何でドロボウがノックすんだよ……」

今井が呆れたように言った。確かにそうだが、氣味が悪い。ノックの音は、未だ聞こえる。それもさつきより大きくなつていいよう

な。

テントントントントントントントントント

「アーッ、ボウジやなことしたら…何だよ…?」

「さあな。傘持つてくれか」

「何で!」

「いや、万が一に備えて武器」

「傘で倒せるのかよ。どうせならさうと強そうなもん貸せよ

…

「じゃあ、包丁とか持つてけ。変なもん切るなよ、新しいの買つて返して。もしくは新しいで返す」

テントントントントントント

「いや…、じゃあ、一応借りてくばさり」

「はーはー。わよなり」

「お前も一緒に来てくれよー」

「何かすげー胃が痛いんでさつたと帰つてこないで」

「おーーー!」

近、ネックで怖い話をかり見ていいからか。  
いつも再び布団に潜り込む。俺はナチュラルに怖かった。最

しかし、頼みの綱の今井は布団から出る気はないらしい。今井のキッチンから包丁を一本押借して、俺は再び俺の部屋へと向かつた。

トントントン…  
トントン…ト…

301号室前。やはり、音は部屋の中から聞こえる。試しにドアノブを掴んでみると、やはり鍵はかかっている。としたら、何だ？何がいるんだ？レオパレスの平たい鍵を差し込み、ゆっくりとドアを開けた。

トントントン…  
トントン…ト…

部屋の中は真っ暗だった。22時頃に出たままの状態。パソコンだけが微妙についていて、モーターの音と、そして、ノック音。確かに俺の部屋から聞こえる。恐る恐る玄関の電気をつけようとした時、

「あ、あれ…れ？」

パチン、パチン。

何度玄関の電気のスイッチを押しても電気がつかない。おかしい。ブレーカーが落ちてる？いや、そんなことはない。パソコンは動い

ているんだから。電気がつかずに、パチパチとスイッチを入れていると…

トントン…トン…  
トン、トントン…

やはり、物音が聞こえる。この音はなんだ？その音は玄関から3歩ほど歩いた…風呂場から聞こえてくるようだつた。もしかしたら、水漏れの音？だとしたら、水道代勿体ねえじやん！と反射的に家に踏み込む。俺にとって恐怖く水道代である。それでもしつかりと護身用の包丁を持って、風呂場のドアをスパーンと開けた。

が、そこには何もな…くなかった。

浴槽の中にたっぷりと水が張つてあつた。蛇口から水が滴つていて、それが、トン、トン、トンと規則正しいリズムを刻んでいる。おかしい。俺、夏場はシャワーだけだし…こんなに溜まるほど、水だつて…とりあえず、蛇口の水を止めようと風呂場に踏み込むと、浴槽の中にソレはいた。

「つ…なんだ、これ…！」

浴槽の中の水の中には、一体の人形が沈んでいた。暗くてよく見えない。心臓が飛び上がりそうな衝撃に俺は固まってしまう。その視線の先には、人形。だんだん、だんだんとその輪郭が見えてくる。それともう一つ、それに巻き付けられた…赤い、糸…！

瞬間的にあるひとつ物語が俺の頭の中によみがえった。とある  
怪談、都市伝説。ありえない、ありえない。あれは読み物としてお  
もしろいんであつて……。そんな、なんで、こんな……。

見覚えのあるテディベア。

水の張られた浴槽。

赤い糸。

暗闇の部屋。

電源の入ったパソコン。

そして、包丁を持った俺>オーラー?

「ツ、わ…あ、あ…！」

足が竦む。一瞬にしてあの怪談の頭から結末までを思い出したのだ。水に沈められたティベアが俺を見る。ひたすらの恐怖に後ずさるが、浴槽の淵に思い切り踵をぶつけ、そのままバランスを崩し、廊下に尻餅をつく。

尾？骨の痛みよりも、今は恐怖の方が勝っていた。俺は尻をついたまま、ドアまで後ずさる。気持ち悪い、氣味が悪い。ななみは、ななみは一体何を俺の部屋で…！怒りと戸惑い、恐怖にドアに飛びついて外に出ようとした…が、

「ツ、開かないツ…！？」

ドアはびくともしない。まず、ノブが下がらないのだ。おかしい、おかしい、おかしい！パニックになつて、何度もノブをガチャガチャと動かそうとする。が、開かない！鍵を何度も回した。確かに鍵は開いているのに…開いているのにツ…！

「なんツ…だよ、これ…開け…開けろ！開けてくれ！」

悪態を吐きながらドアノブを回すも、虚しい金属音の音が響くのに、一向に開かない。仕方なく、包丁を置いて両手で開けようと思い、包丁を置こうと振り返った時だった。

「ひつ……」

さつきまで、さつきまで、そつ、そここは、何もなかつた筈なのだ。だって、俺、廊下、這つたじやん？這つたよな？おかしいだろ、なんで、なんで、なんで、こんなところに……ツ

テディベアが、廊下に転がっていた。  
水に濡れ、赤い糸がべつたりと巻きついたテディベアが、部屋の奥の窓から差す逆光の中に立っていたのだ。

息が出来ないほどの焦り、恐怖。そして、金縛りにあつたかのように動かない体。ちがう、これが金縛り？違つ、そんな、バカな。俺の目はそのテディベアに釘付けだつた。目を逸らしたい、逸らせない、なぜ？水に濡れたテディベアの周りに出来た水溜りが、どんどん、どんどん、広がっていくからだ。

小さな水溜りが、床を這うように広がっていく。吸い込んだ水が出てこいるだけとは思えない。尋常な量じやない。それは、するすると、まるで一つの生き物のようにして、俺の方向へ向かってくる。ゆっくら、じわじわと迫りくる。

「ど、う……なつて……」

鳥肌が立ち、両足ががくがくと震えた。しかし震えるだけ、動かない、ドアが開かない、逃げられない。俺は、叫んだ。

「ツい、いまい…今井ツー！今井ツー！」

もう夜中だろうが何だろうが関係ない。部屋越しに叫んだ。レオパレスの壁が薄いという都市伝説を頼る他ないのだ。もうこれは駄目だ、助けて貰う他にない。俺は声いっぱいに叫ぶ。

「今井ツー！今井ツー、気付けよ、今井ツー！」

しかし、叫び声だけが響くだけで、今井からの反応はない。いつのこと壁を叩きたいくらいだったのに、金縛りがそれを許さない。歯がゆい、恐怖、俺は何度も叫ぶ。嫌な汗が吹き出る。心臓が痛いほど鳴る。しかし、水は蛇のようになるすると俺に迫つてくる。そして、俺は見てしまった。

するすると伸びる水が、ところどころで途切れて小さな水溜りを作。それが、その小さな水溜りが奇妙に変形するのだ。それはそう、まるで、足跡のような形に…！

「も、駄目ー！今井ツー、気付けよ、今井ツー！」

水、そして、足跡が俺に迫る。それはだんだんスピードを増すよう、俺の元へ一直線でかけてくる。もう駄目かもしない、そう思つたのと同時に、ふと、頭の中に言葉が浮かぶ。適切な判断をする暇もなく、瞬間に俺はその言葉を叫んだ。

「さ……最初の鬼はツ、い、井坂弘毅だからー。」

もう叫ぶと、水がピタリと止まった。俺は続けた。

「最初の鬼は、井坂弘毅だか、ら……最初の鬼は、井坂、弘毅つ……！」

なんてことを言つてるんだ、そう思つた。けれど、みるみる内に、水が引いていく。足跡の水が、蒸発するように消えていく。どうした、これは、どうなつてんだ。その水は全て、テディベアが吸収するかのようになくなつていく。

ほつとしたのも束の間、とんでもないことをしてしまつたことにも気づく。何て言つた？俺は、さつき、何ていつた？

『井坂弘毅が鬼』？

それは、ひとりかくれんぼを始めるための文言であり、宣言。何で、そんなことを言つてしまつた？待て、待て待て待て……！待てよーそれじゃ、これは……。

ひとりかくれんぼの宣言をしてしまつたんだ……！

目の前のテディベアが、音もなく、ただただ、もたれた頭で俺を

見つめていた。

幼い頃から靈感があるとかないとか。いや、そんなことはどうでもいいんだけど、何かそういう類に敏感なようで、墓場の近くとか曰く付きの場所だとかに近づくと必ず体調を崩した。

### 胃が痛い。

昨日もそうだ。3時を回ったあたりから胃がキリキリと痛むのだ。気分が悪い。先程の井坂のばにくつた発言が気になるが、もう俺は寝てしまひたかった。井坂が出て行く時に不穏な気配を感じた（こういうと非常に中一病臭い）から、呼び止めようと思つたけれど、基本的に厄介事は嫌いなので華麗にスルーしたが。

それよりも、井坂の持つていつた包丁の方が気がかりだった。ちやんと返して貰えるんだろうか、ということと、包丁片手にドアの前とかに立つてゐるのを見られたら、色んな意味で勘違いされんじゃね？くだらないことばかり考えずに、さつと寝てしまおうと目を閉じた。

### が、一つ、不思議なことがある。

隣の部屋から、全く物音がしなくなつたのだ。いつもなら、それなりに生活音が聞こえるもんだが。ドアを開ける音、閉める音は「ボ」。それが、全く聞こえない。嫌な予感がした。

もしかして、殺されてんじゃね？

「しかし、第一発見者が疑われるとか理不尽すぎるよな…」

仮に泥棒だったとして、そいつに殺されてたとかね、で、まだ家にいて、俺も殺されてしまうとか。うわ、最悪だろ…と思いつつ、薄い黒のカーディガンを羽織りながら部屋を出て、サンダルを履く俺。マジ感謝しろよ。音のない井坂に心中で唾を吐いた。しかし不思議なぐらい物音がしない。

部屋を出て、すぐ隣の301号室の前に立つ。が、物音はしないか？

とりあえずまだ中に犯人とかがいたら嫌なので、ドアに耳を当てたが、何も聞こえない。と、思つたら、微かな足音が聞こえた。井坂か？それとも犯人か？と首を傾げるのも束の間、耳障りな金属音。ガチャガチャガチャ、と微かにドアノブが動く。反射的に身をびくつかせた。

「井坂？」

ドアの前で呟くも聞こえる筈がない。その尋常じゃない動きに、身の危険を察知した。鳩尾がぐつと痛む。気持ち悪くなつてきた。しかし、その途端、中から微かに声が聞こえた気がして、ぱっとドアに耳を当てる。

『…ツ、…なんでツ…！？』

確かに井坂の声だ。しかし、そのドアノブの金属音でかき消されて、何を言つてているのか聞き取れない。鍵も回しているようで、鍵の開閉する音が繰り返し繰り返し聞こえるも、ドアが開く気配がない。井坂が中で何か喚いている。…ドアを、開けようとしてる？

「井坂、オイ、井坂！聞こえるか！」

ドアを叩くも、反応はない。ひたすらドアノブの音、井坂の喚き声。どうしたんだ、警察か？警察を呼ぶか？と思つた瞬間、ピタリ、とその音が止んだ。

「井坂…オイ、井坂…？」

呼びかけるが、返答もナシ。

念のためにドアノブに手をかけたが、鍵が開いていないようで開かない。どうするか、と思つた時、声が聞こえた。

『ツい、こまい…今井…ツ…』

「井坂！？」

気づいたか…ヒドンドンとドアを叩くも、井坂は錯乱したかのように声を張り上げるだけ。

『助けてくれツ…今井、今井ツ…』

『いるつつの…どうしたんだよ…オイ…聞こえてんのか…』

思わず深夜だといふのに声を張り上げた。が、井坂は反応しない。聞こえてないのか。様子がおかしいのは明らかだ。ひたすら、ドアを叩く。が、だんだん、だんだんと気持ちが悪くなつていぐ。吐き気がして、その次に頭がくらつとして、思わずコンクリートに膝をついた。迫りあがるような気持ち悪さ、眩暈。それは、墓場だとかに近づいた時と同じ。

心の中で勘付いてはいたが、霧雨気に負けた精神的なもんだらう

し、何よりこの歳で幽霊とかそういう類を信じるのも馬鹿馬鹿しくて考えようとはしなかった、が…この部屋には間違いくなく何かいる。変だ、気持ち悪い。ずるずるとドアに寄りかかった。井坂の喚き声が聞こえる、が、それも遠く、遠く…

『さ…最初の鬼はツ、い、井坂弘毅だから…』

突如としてその声が耳元でクリアに聞こえて、はっと我に返る。井坂が何かを叫んでいる。眩暈が引いている。声がはつきりと聞こえたのは、そうか、ドアに寄りかかって座つた俺の耳元にポストがあるからだ。除き防止の屋根が付けられたそこからは、中は見えないが音は十分に聞こえる。

震えた声が叫んでいる。誰に？…鬼？鬼って、何のことだ。とうとう頭がいかれたのか？と思う矢先に、ふつとあることを思い出す。井坂がしゃべっていたことだ。

なあ、ひとりかくれんぼって、知ってるか

一方的に話し出した井坂の話を相槌も打たずに聞いていたが、気味の悪い話だったのだけが印象的で、その中に、そんなくだりが…。

実行手順2

3時になつたら『最初の鬼は（自分の名前）だから』

とねこぐるみに向つて3回鳴つ

はつと気付いて、俺は、気持ち悪さを残す体を起こして、ドアを叩いた。嘘だろ。バカか！

「井坂！やめろ！ばかか！」

ドンドンとドアを叩くが、井坂は繰り返す。

『最初の鬼は、井坂弘毅だか、ら……』

2回目を言う。聞こえていねーのかよーもじかしさにドアを叩きまくるが、ついに、

『最初の鬼は、井坂、弘毅っ……』

5月28日 03:24 (金)

「バカか…」

思わず口に出して聲くじ、不意に背中からゾンビゾンと血の振動が  
伝つ。

『今井！？ いんのか！』  
「なに、君、今氣付いたの…」

ドア越しに井坂の声がした。どうやらポスト周辺でしゃべつてい  
るらしく、かなりクリアに声が聞こえた。俺の声に本当に氣付いて  
なかつたらしい。よっぽど混乱していたのか。それは俺も同じか。  
ドアにもたれかかったまま、話す。

「で、どうしてこんなことになつてゐる…」

『知らねーよ… どうなつて… いつたい』

「ねえねえ落ち着いてくれる？ それと怒鳴んなくとも聞こえるから、  
つるさい」

さう静かに言つが、井坂は黙らない。

『ちげえんだよ… つか、俺…俺…ひとりかくれんぼ、とか…』

「井坂くんが鬼なんですね？何やつてんの？ドアは？鍵かけてない？こっちからは開かないよ？」

『俺の方からも開かないっていつか…－多分、これ…違う、逃げられないようにしてあるんだ…』

「どうこいつと…っていうか、落ち着いて話せ」

それは自分自身に言つた言葉かもしれない。

普段だつたら、それが井坂の狂言というか、何かまたバカやつてるなくらいしか思わないのに。それが今日は違う。何がある、何ががい。

井坂は部屋に入つてからの出来事をドア越しに話し始めた。水に浸かつた人形、赤い紐、付けっぱなしのパソコン、水溜り、足跡、そして、人形のテディベアについて、そのテディベアが妹さんのものであることについて。そして、「ひとりかくれんぼ」のルールについて。大体は察しがついた。

おおよそをまとめると、昨日騒いでいたのは、妹さん。妹さんはラブホ代わりではなく、ひとりかくれんぼの会場にした。昨日の具合の悪さもそれで説明がつく。

「で、その妹さんは連絡が取れない訳で？」

『ひとりかくれんぼをやつて、まだ人形が回収されてないってことは…ななみは…』

「ななみさんが失敗した可能性があるね」

『…ツバカ、かよ…！何だつて、こんな…』

『自宅に連絡を取つてみた方がいいんじゃない？緊急事態だし、妹さんの安否の方が先でしょ？』

『ツ…分かつた…わかつたよ』

仕方なし」と言つた風な声音で井坂が答え、「じゃじゃ」と音をさせた。しかし、すぐに井坂が声を上げた。

『電波がない……』

「はあ？」

俺は素つ頓狂な声を上げた。思わず、自分のポケットの携帯を見たが、同じく、電波がない。

そういうや、こいつのブログに「検索すると電波が切れる」とか、そんな書き込みなかつたか。ぐわ、といつ悪態がドア越しに聞こえた。

「どうする?」

『どうするもくそも…どうしたらいいんだよ』

「それ、とにかく終わらせた方がいいんじゃない?」

『ひとりかくれんぼを、か?』

「そう。ともかく今は君が鬼なんだよな? 妹さんが失敗してるんなら、君が成功させり。そうすれば出れるかもしねり」

『…ソースは?』

「イチかバチかに決まってるだろ?。でも今のところ、思いつく方法はない」

『ですよね…あ、2ちゃん!』

「は?」

井坂が思い出したかのように話し始めた。

『確かにそれ、まとめスレ見た時に現行スレが生きてるらしかつた! それ、2ちゃんねる発祥なんだよ! 手がかりがあるかもしねりないし、状況が状況でマジやばい。もしかしたら手を貸してくれるかもしねりない』

「ネットリテラシー……」

『イチかバチかだろうが！』

「猫の手も借りたいってな。分かった、調べてきてやる。じゃあ一応やるのは待て。お前、そこで待つてられるか」

『……待つてられないって言つたらどうするんだ……待つてる。頼んだ』

返事はせずに、立ち上がった。立ち上がった瞬間に立ち眩みがする。

厄介な隣人のためになんで俺の睡眠時間が削られるんだ、意味分からん。と思いつつ、お隣さんが呪いの部屋とかになると嫌なので、早速、調べてみることにしてみた。と、その時だった。

「ツ……！」

アパートの階段付近に、人影が見える。薄暗い人影はこちらをじつと見つめている。俺は蛇に睨まれた蛙状態、思わず体が固まった。は？これって部屋の中でする遊びじゃねえのかよ……思いながら、後ずさると、その影は、たん、たん、たんと階段を上がつてくる。幽霊が外からもとか、どんだけだよ！悪態を吐こうと思ったその時だつた、その人影が言葉を発した。

「あ、あの……」

その声を聞いて、ようやく、幽霊じゃない、ただの人だといふことを認識。認識した瞬間、自分のびびりと情けなさ、それと安堵にため息を漏らした。恐らく、下の住人か。うるさくしたから文句言

いにきたのか、俺のせいじゃないのに。しかし、階段を登ってきた影が、レオパレスの公共ライトの下に出ると、その人が… その少女がうちのレオパレスの住人でないことに気付く。

誰ですか、と、問いかける前に、その少女が口を開いた。

「あの、井坂サンの… お兄さんですか？」

その小柄な少女は、視線を俺と301号室を交互にチラチラと見た。

何か、知っているな。

すぐにピンと来て、俺はその質問には答えずに、質問を返した。

「君は？」

尋ねると、少女は少し戸惑い、戸惑つといつか、躊躇するよひに言葉を詰まらせたが、やがて俯いて静かに答えた。

「愛川由紀子、井坂ななみさんの…友達です」

言われた通りに自室に戻り、インターネットで「2ちゃんねる」に入った。隣には、顔を青白くしている少女、愛川由紀子が座り、罪悪感か何なのかよく分からぬが、俯いている。俺も愛川も無言、キーボードを弾く音だけが部屋に響いた。

「それで、友達を助けよつて来たわけ？」

冷たく聞く。わざと冷たく聞いた訳ではないが、声音は確かに冷たい。逆に言えば、優しくする義理だつて何ひとつないのだ。俺は被害者である。愛川は、小さくはい、と答えた。

愛川の話を簡潔にまとめるところだった。

愛川と、愛川の友人である長瀬祥子は、ひとりかくれんぼを知り、実行するにも自身では出来ず、井坂妹に実行を依頼。井坂妹は快く引き受け、会場は井坂の家、実行者は井坂妹、外部待機に愛川と長瀬としたのだった。ついでに2ちゃんねる本スレに実況もすることとなる。しかし、実験途中にアクシデント発生、井坂妹が捕まり、パニックに陥りかけ、それを長瀬が助けようとして中に入り、2人も出てこなくなつた。愛川は怖くなり、逃亡。翌日になつても、長瀬と連絡が取れないままにいるだけでなく、井坂と長瀬は共に学校を休んでいる。だんだん不安になつて、こんな時間だといつのにここまで来たといつ。

そう俯いて俺に事情を話していたが、嘘くせーな。といつのが正直な感想である。別にこの話を聞く限りはふーんという感じだが、それを話している愛川の目がキヨロキヨロと宙を彷徨い、しきりに

手を自分のスカートや髪にやっていたからだ。典型的な嘘を吐く仕草である。そしてまた、馬鹿じやねーか、とも強く思つた。

「説教するつもりはないけど、ね、俺も迷惑こいつむつていてるし、兄貴の方も今なんかやばくなつてるから、そういうことはもう少しつと考へてやれば?責任の取れないことはしないでよ」

「…はい…すみませんでした」

一応、腹の立つままに言つて、謝罪は貰つたが、それで事態が動く訳でもなく。それ以上は咎めずに、2ちゃんねる検索でスレッドを漁つた。スレッドの名前は【ひとりかくれんぼ 189夜目】分かりやすくていいですね。

覗いたスレッドのレスは600の前後、投稿時間を見ると、流れが異様に早いのが伺えた。そして、何よりもそこら中に散りばめられた『ナナ』というカタカナ。井坂妹の名前は『ななみ』という。

「この、ナナっていうのが妹?」

「はい…あの、ななみサンが出たのは200くらいからで…」

「そうしたら、結構進んでるね。状況が読めないけど」

状況は読めないが、スレを追えばそれも可能だ。200、正確には177から戻つてレスを追つた。

ナナの書き込みは5月26日3時44分を境にして消えていたし、有力な手がかりどころか、ありもしない憶測だけが飛び交い、スレをにぎわせていただけだった。使えない。しかし、イチかバチかと井坂は言つた。とにかく、書き込んでみる。

904 2010/05/28 (金) 03:57:45 ID:

イチバチだ。どうせまともな答えなど帰つてきやしないし、即レスも期待はできないな、とおもつていたが、一度F5を押すと、すでに3件レスが来ていた。意外に頼もしいかもしない。

ひとりがくれんぼするハメになつています。  
どうしたらいいですか

6RagD1qeo 9032010/05/28(金)03.56.49 ID: -  
名前: -  
すみません。

U gZQN9710

前 :

<<903

日本語でおk

- - - - -  
905 2010/05/28 (金) 03:57:49  
XE4H+55L0 ID :  
名前 :

<<903

とつあえず落ち着け。  
わつぱり分からん。

- - - - -  
906 2010/05/28 (金) 03:57:50  
YEEk7v9gO ID :  
名前 :

<<903

それは省略したらいかんだろ  
どうしてそりなったwww

「.....」

だからネットって嫌なんだよ。察せよ。

しかし、投げやりだつた自覚もある。隣の愛川は、口元に手を当てた。うるさい、どうせ説明すんのへたくそだよ。面倒だらうが。心中で言い訳を重ねて、席を立ち、愛川に詫ひ。

「面倒だから理由は君が書けよ、懇切丁寧になよ」

「え、あの、すみません」

「いいから早く。俺ノート出して、そつちで別の」と調べるから

促すと、愛川は席をすらし、俺のパソコンを弄る。カタカタといふキーボードの音を聞きながら、俺はノートパソコンを立ち上げた。ランでつながれたインターネットを開く。そして、すぐにグーグルで「ひとりかくれんぼ」を調べた。

いかにもオカルティックなサイト。黒背景、白文字、赤リンク。  
目がチカチカするようだ。

とりあえず、ひとりかくれんぼについての知識は井坂から聞いたのみであるから、基本事項を確認するべく、実行方法を呼んだ。その内容はいかにもだ。何かやばそう、と思つと同時に、どこか好奇心をそそられるような方法だ。これが昨日、俺の家の隣でやられていたと思つとぞつとするし、俺の気持ち悪さの原因もこれだつたんだろうな、と思つとげつそりする。

さうとやり方を見ると、下の方に何か書いてある。補足だった。

- ・家の外に出ない
- ・電気（明かり）は必ず消す
- ・隠れてる時は静かに
- ・2時間までが限度

田を疑つた。2時間まで?ということは、あんまり時間はないのか?いや、すぐに終わらせられれば十分に…しかし、それだつてすぐ終わらせられたらの話だ。井坂が宣言したのは何時だつた?3時20分過ぎの話だ。とすると、タイムアウトは5時20分。今から1時間20分くらいだ。終わるのか?さつさとした方がいいのか?でも、それは本当に正しい判断か?それを促して、本当に大丈夫なのか?もし井坂まで消えたら?

しかし、『じちやーじちや』と考えている時間はない。

井坂が消えようが消えまいが、俺に一切の責任はない。よし、促すしかないな。そう思つて、席を立つた時だつた。愛川が、声を上げた。

「あ、あのー」  
「役に立つ情報あつた?」  
「あの、えつと…その…」

言葉を濁した愛川に、舌打ちを打つと、愛川が肩をびくりと震わせた。いいから言えよな、時間ないから。

「あの… 確証はないんですけど、霊能力者さんが、ななみサンが変なことするからいけないって言つてているんです」

「変な」と? なにそれ

—それが……

返答を待たずに、デスクトップのパソコンを覗き込むと、ひとつ書き込みが目に付いた。

名前

どうせ自称霊能力者とか言われるだらうけど、書いておくよ。

903

ナナは正規の手順踏んでない気がする。  
すごく禍々しいものを感じた。  
特に人形がやばい感じがした。  
何か変なことしてんじゃね?  
本人いないから確認できなきけど。

お兄さんがどうしてそうなったのかは  
よく分からぬけど、

す」「危険だから、ものすごく注意して。

消えた一人だけど、死んでるんじゃないかな？

怨念が電波介して感じ取れるレベル。

お隣さんは、壁際に塩盛つておいた方がいい。

正規の手順を踏んでないって、どうこうことだ？ その方法のページに書かれたことと別のことをしてるってことか？ 意味が分からんが、井坂にはそつ抜えておくとしよう。しかし死ぬとか物騒だな。それはそうと、だ。

「愛川」

愛川の顔は先程よりもっと青ざめていた。恐らく「死」という言葉に恐怖を覚えたんだろう。しかし、自業自得であると切り捨てて、言つ。

「皿は適當なの使つて、塩持つておいて。ついでにやり方ぐぐむこと。それで、引き続き、スレで情報集めろ。俺は隣行つてくる。何かあつたら呼べ。塩が優先事項だからな」「はい…」

冗談じゃない。とばっちりなんぞ受けたまるか。

愛川に指示を出して、俺は廊下を歩き、サンダルを履いた。愛川

が、後ろからついてきて、小さこキッキンをキョロキョロと見回していった。

「塩は戸棚右。食器は下。あと塩いじめなこよひ」  
「はい」

サンダルを履きながらそいつと、愛川はぱつと動く。小動物みたいだ。愛川を視界の片隅で見ながら、外に出た。

耳元の郵便受けから、隣の部屋のドアが開く音が聞こえた。電波のない携帯が微かな光をうみ、それが時刻を教える。でも、それもいつの間にか見なくなっていた。何もできずに待つ時間は精神的によくなかった。目の前には水浸しのティベアが置いてあるが、それだけで恐怖に気が狂いそうだった。俺は今井を信じて待っている間ずっと、外に出たら見たいアダルトビデオについてひたすら考えていた。エロいこと考えると幽霊いなくなるとか聞いた、多分。そんな不確かな情報にも頼った。藁をも掴む思いだった。

しかし、その藁よりもはるかに頼れる今井のドアの音。思わず、声を荒げた。

「今井！何かわかったか！」

ドアが軽い衝撃が走った。今井がドアを蹴ったのだ。

『今しがた、妹の友達が俺のここに来た』

「あ！？」

『うるさいよ。ちゃんと聞こえるから、もっと静かにリアクションして』

今井は面倒そうに、事のあらましを喋った。妹の友達、愛川さんと長瀬さん。ひとりかくれんぼの顛末と、妹だけではなく、長瀬の失踪。それも現場は俺の部屋。しかし、俺の部屋には2人の跡形もない。ひとりかくれんぼの2時間のタイムリミット。そして、2ちゃんとねる自称霊能力者の情報。

一番最後の情報に、俺は耳を疑つた。

「死んでる、とか…やめろよ」

『まあ、一人が、とは言つてたし、所詮自称だからな。あと、妹が何か嘔吐いてないかってこと』

「嘔？」

『妹はテンプレ通りやるつて宣言してたけど、どつか違う箇所があるらしい。あと、爪じゃなくて髪を入れてる。それ以外で何か嘔ついてるかもしね』

「髪？髪って、そんな…髪は爪よりもまずいってどつかに」

『そこまで知らない。まあそんなとこだな。有力なアドバイスはないみたい。ただ俺の部屋に塩盛るつていうアドバイスは貰つた』

「おい」

『俺は被害者だからな。優先して守られるべきだ』

今井はしつれつとそう言った。

とにかく、やるしかないらしい。

「手順は、どうしようか」

『宣言までは終わつている。ぬいぐるみの名前は「チコ」だ。掲示板によればな。嘔なら元も子もないが…名前は、新たにつけるか？「仮にななみが捕まつているとしたら、ななみが鬼だから…でも長瀬つていう子も次に見つかつているはずだから…長瀬が鬼？』

『どちらにしろ、最後に人を刺すつもりか？やめとけよ』

そう言わればそうだ。

『それに、今は強制的にお前が鬼つて宣言したんだろ？』

「でもななど長瀬さんが見つからないってどういうことなんだよ？鬼に見つかったから？でもルールは鬼に見つかったら鬼交代だろ」

『勝つていないと、終了宣言してないみたいだからな…』

「分かつた」

『何が?』

「宣言すればいい。鬼は、俺となみと、長瀬さんだつて」

宣言という文言が重要だ。そう付け加えると、今井ははあ?と訳が分からぬといふ反応をする。俺は更に付け加えた。

「たとえば、今現在、捕まっている。『鬼である可能性のあるなまと長瀬さんを、俺たちが鬼だと再宣言すること』によつて、無理やり解放する。『俺が仲間になる。』そうすれば、俺となみと長瀬さんが鬼だ。』そうして、鬼の一人である俺が人形を刺す。』そうすれば、鬼の権利が俺たちから人形へ移る。鬼が捕まえなきやいけないのは、俺となみと長瀬さんだから、この一人がここで出てくる可能性がある。

もしくは、鬼の一人である俺が人形を刺せば、鬼の権利が人形へ移り、鬼である人形となみと長瀬さんの3人が俺を探す筈だ。そこで俺がなみと長瀬さんを見つける』

理論的に言えば、可能な筈だらう?尋ねると、暫く今井は考えて答えた。

『出でくるつて、どういう風に出てくる』ことを期待してゐる?

『ゆ、幽霊とか?いやいや! 実体で出でくるだろ! それで、塩水をかけて保護して、俺が高速で人形に終了宣言する』

『…保証はないし、穴だらけだけど、俺も残念ながら何も思いつかない。イチバチだらうが…塩水はあるの?準備できる環境?』

今井は呆れたような声で言つていたが、一応は心配してくれているらしかつた。

俺はゆっくりと立ち上がった。

「大丈夫だ。ちゃんとある。ペットボトルはないが、一升瓶がある」

『あ、ちょっと待つてよ』

ドア越しに音が聞こえて、今井は一度、家に戻つたらしい。しかしすぐにまたドアが開く音がする。そうして、ドアのポストから、何かが差し込まれた。暗くてよくみえない。

『これ持つてなよ』

『え、なんだこれ』

『お守り。ないよりマシだる。ポケットにでもいれとけ。あと、隠れるのはクローゼットの中だろ? 備え付けの。その壁はさんだすぐ傍にいてやる。大声で叫べば、聞こえるかもしれないから』

『お前…』

いつになく、今井が優しかつた。いつも辛らつなのに。初めてこいつと友達でよかつた、と思つた気がした。思わず感動しながら、渡されたお守りを目を凝らしてみる。しかしそこには、

## 【 合 格 祈 願 】

…ないよりマシつて、本当にそのレベルだつた。これは今井の善意なのか、嫌がらせなのか…いや、善意として取つておこう。

「…あ、ありがとうよ」

『ちなみに俺はそれで第一志望は落ちている。俺の怨念が詰まつた  
お守りだから、効果あるかもな。まあがんばれ』

「……はい」

妙な脱力感と共に、ドア向かいでまた音が聞こえた。恐らく部屋  
に戻つたんだろう。合格祈願はポケットにしまつて、それでも妙な  
緊張は解れた。さて、問題はここからだ。大きく息を吸つて、吐い  
て、俺は人形に向かい合つた。

おそるおそる、人形を跨いだ。が、特に何も起こらなかつた。ほつと胸をなでおろす。しかし、毅然とした心を持たなければならぬこと、何か本で読んだことがある。恐ろしい、恐怖、もしくは同情。それらは憑かれ易く、呼びやすいと聞く。強気でやらなきゃいけない。ななみと、長瀬を見つけるんだ。

#### 実行準備、その一。

人形はすでにある。といふことは、塩水を用意しなければいけない。

一升瓶を手にとつて、そこに水をじやぶじやぶと入れた。その間に塩だ。手探りで塩の入つた瓶を探し、一応、舐めて確かめた。間違えて砂糖なんか入れたら話にならない。塩であることを確認し、一升瓶に多めに塩を入れた。それを二本用意した。一本を、備え付けのクローゼットの中に入れる。一本目は、常に手に持つておこうと思つ。

#### 実行準備、その二。

風呂桶に水を張る。また人形を通りすぎ、風呂場に向かつた。中は真つ蔵で、僅かに浴槽の黒い水の光が反射している。その浴槽から洗面器に水を取つた。張られた水は、やけに冷たかつた。

#### 実行準備、その三。

テレビの代わりに、スリープモードになつてゐるパソコンをつけ

た。明るい画面には、ウインドウズメディアプレイヤーが開かれていて、そこにはDVDディスクが入っている。何だ？思つて開いてみると、音と共に「カリオストロの城」だ。恐らく、妹はこれを使つたんじゃないか。妹と同じく、俺もそれを流すことにした。

ちやくちやくと進んでいる準備に、少なからず胸が騒いだ。これで準備はいいはずだ。玄関に置いていた今井の包丁を拾つて、あとは、宣言だ。

しかし、問題はここで起つた。

「あ……れ……？」

おかしい。玄関においておいたはずの包丁が見当たらないのだ。思わず、携帯のライトで照らして探すが、ない。ない。どこにも……ない。

急に背中にぞつとするような寒気が走つた。しかし、もしかしてを考えてはいけない。負けてはいけない。自分に強く言い聞かせた。代わりに、自分の家の包丁を使うことにした。

素足で廊下をぺたぺたと歩き、そして、足元のびしょびしょの人形を拾つた。赤い糸とティベアの毛が手にべつたりと張り付く。気持ち悪い。もう一つ、気持ち悪いことがあった。

恐らく、ななみはこの人形を使ったのだろう。しかし、この人形にはどこにも傷跡がないのだ。包丁さした跡がない。あるのは糸を入れるときにできた穴、しかしそれは赤い糸でしっかりと縫われている。

身の毛がよだちそうな思いであつたが、風呂場に入つて、洗面器にその人形を入れる。人形は水にすぐに沈む。手についた水を、ズボンにぬぐつて、そうして大きく深呼吸をした。

「最初の鬼は、井坂弘毅・井坂ななみ・長瀬祥子！  
最初の鬼は、井坂弘毅・井坂ななみ・長瀬祥子！  
最初の鬼は、井坂弘毅・井坂ななみ・長瀬祥子！」

宣言してすぐに、俺は用意しておいたもう一つの一升瓶を持って、部屋に戻る。後は、手順通り。部屋の電気はもともと何故かつかないでいいとして、俺はパソコンのウインドウズメディアプレイヤーをつけたカリオストロの城を流した。そして、部屋の真ん中で、目を瞑り、数をかぞえた。

「1

これが果たして正しいのかはわからない。

「2

しかし、タイムリリッシュとも近い。

「3」

どうか、見つかってくれ。

「4」

ななみ。

「5」

そう数えた時だった。

物音が聞こえる…物音?いや、違う。水音だ。  
息が詰まる。それでも、数をかぞえる。

「6

ちやふん、ちやふ…  
水の揺れる音がする。  
なんで、何かきてる?

「7

分からぬ。怖い。  
しかし、水音は止まない。

「8

早く、数え終わりたい。

「9

早く、早く。

数え終わつて、ぱつと田を開ける。

しかし、待つっていたのは、恐怖だつた。

「なんッ……で……！」

部屋の真正面、開け放たれたドアの、もつと先の廊下に、廊下にて、  
テディベアがいる。俺を見ている。思わず、後ろに退いた。  
なんで、なんでだよ。さつきは、確かに、俺、風呂桶の中にいれ  
たよな？間違ひなく、入れたのに！

恐怖に全身に鳥肌が立つた。

しかし、恐怖に負けてはいけない。強い心を持たなければならな  
い。生唾を飲み込んで、そして、足元にいた一升瓶を再び持つ。

ゆづくつとテディベアに歩み寄る。備え付けキッチンに用意して  
おいた包丁を手に取つた。手のひらに嫌なくらゐ汗をかいていた。  
気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

しかし、やらなければならぬ。

俺は、ななみを取り返す。

大きく包丁を振り上げた。

「…チコ、みいつけた」

ぐさり、と嫌な感触がした。少なくとも、人形を刺すような感触じゃなかつた。布を破り米を刺す感覺じやない。肌を突き、内臓を突き刺すような柔らかな感触。人を刺したことなど勿論ない。ただ、その人形は想像以上に、生々しい感覺を俺に与えた。

生睡を飲んで、俺はゆつくりと宣言した。

「次は、チコが鬼つ…」

そういうとすぐに、俺は一升瓶を持って、あたりを見回した。なみが…いや、ななみや長瀬さんが戻つてくるかもしれない。部屋へ後ずさりながら、見回すが、何もない。くそ、と悪態を吐いて、俺はすぐにクローゼットの中に入った。

クローゼットの中は、狭苦しかった。息苦しい感じがする。外からは、ルパンの愉快な声が聞こえる。それが返つて恐怖感を煽る。これじゃ気も変になるよな…と、自嘲気味に笑つた。これで、ルパンの音声が切れるまで待たなきやいけない。圏外の携帯の時刻を見ると、4時31分をさしている。再宣言の時刻は、万が一にも無効として、そうすると残り時間は1時間を切つている。終わるのか、終わらせなければ。

しかし、本当に狭いな。もぞもぞと動くと、何か足の先に硬いものが当たつた。なんだ?と、携帯のライトで照らすと、そこには白い携帯。ななみの携帯だった。

ななは、ここに携帯をおいていったのか…そう思つて、その携帯を見ると、まだバッテリーが残っていた。黒い待ち受けが、ぼんやりと物の輪郭をつけていった。

そして、ふと、今井の言つていた『ななみの嘘』を思い出す。なみが何か嘘をついている?いや、割と素直で真面目なヤツで…嘘なんて。

そう思いつつ、手がかりを探すために、ななみの携帯のメール受信フォルダを開いた。人の携帯を見るなんて、とも思つたが、仕方ない。緊急事態だ。

メールフォルダは、二つ作られていた。普通のメール受信フォルダと、家族、と書かれたメールフォルダだ。友達の分は分けてないのか、と思いつつ、普通の受信フォルダを開く。そこには、友人で

ある長瀬祥子からのメールがほとんどだつた。仲良かつたんだな、  
と思い、ふと、一通のメールを開いた。が、そこには。

送信者：長瀬祥子

件名：無題

ていうかマジ髪切った方がイーよ キモイ( ० ० )

思わず、言葉を失つた。  
なんだ、これ。思わず、他のメールも開く。

送信者：長瀬祥子

件名：無題

愛と私と友達になれて嬉しい？？

でも愛も私もあんたのこと

大嫌いだから安心してね ) > ( < b

送信者：長瀬祥子

件名：しね

調子乗るなよ

送信者：長瀬祥子

件名：kimo

オカルト好きとか  
相変わらずきもつ  
ヽ( ま - )ノ ( ) 怨 いさか w

絶句した。メールフォルダのほとんどは、長瀬祥子からの中傷メールだった。俺は思わず、怒りに手が震えた。友達って、なんだよ。これが、ななみの吐いた嘘？それにしたって、ひどいだろ。きもいって…死ねって、そんな。

怒りに震えたまま、俺は送信メールフォルダも開いた。あて先は「日記」ばかり。日記の文章を、携帯で送ってるんだろう。そのメールを開いてみた。すると、そこには。

## あて先：日記

件名：もういいよね

準備もばっちりです。

どうぞ、僕を苦しめる人を消します。  
消すっていうか、脅すだけになりそう。  
けど、かなり有効かもしない。

ひとりかくれんぼ。

あれって、呪いの一種なんだってね？  
ねえ、それ、君にやつたらどうなるかな？

意図的に巻き込まれたことも知らずに、  
かわいそうにね、あはは。

呪われる。

「なな…？」

俺の知らないななみが、ななみの携帯の中にいた。どうこうこと  
だ？どういうことなんだ、なな。  
ななみ。

部屋の外で、パチ、パチッ…と音がして、クラリスの声がブツリと途切れた。

トン、トントン…  
トンントントン…

あの音が、あの音がする…。反射的に身が縮こめた。怖い、怖い、怖い…。

「始まつたみたいだな」

部屋に帰つてからずっと黙り込んでいた今井さんが、突然、誰に言つ風でもなさそうにノートパソコンに向かつて咳いた。そしてチラつと私の方を見る。田が合つ。すぐに逸らされた。泣きたいような気分になる。

「怖いわけ？」  
「…つ、あ、はい…」  
「じゃあ帰れば？」  
「え…」

今井さんは私の方も見ず、冷たくそつ言い放つた。

「正直ここにいたつて君にできることなくない？俺もやることないし、ひたすら迷惑被つてるだけ。偽善意識でいるだけなら帰ればつて言つてんの。得することないから。大体当事者がのうのうとしてるの、見てるだけで俺はむかつくけどね。俺は部外者だけど、被害

者でもあるから。君たちの「

全くの正論。でもそれはひどく厳しく、突き放すような。「ここに来てから数時間経つて、ある程度今井さんの性格が…冷たい、とは感じていたけれど、そんな言い方…でも、そう思われても当然だつた。厳しい言葉に泣きそうになるのを堪えて、頭を下げた。

「す、みません…つ、本当、すみません…」

「……」

しかし、謝つた声と共に嗚咽が漏れた。それを聞いて、今井さんがまたチラリと私の方を見た。苦虫を噛み潰したような顔を見せて、再びノートパソコンに向かい合い、ちつ、と舌打ちをされる。

「…井坂妹が吐いてる嘘つてなんなの?」ちやんの人が言つてたやつ。仮にそれが事実だとして、の話」

急に話題が変わった。今井さんが氣を使つてくれたのだろうか。今井さんは面倒そうに続ける。

「最初に事情聞いてた時から思つてたんだけど、嘘吐いてんのって君じゃないの。なんか隠してない?俺そーゆーこと勉強してる人だから、わかつちゃうワケ。今更隠さないでよね。人、死ぬかもしれないとだから」

死、という単語。脅しに近い。

嘘は、言つてなかつた。でも、伝えてないことはある。あまり言いたくなかった。サチのことを悪く言いたくなかった。けれど…けれど。

「…ななみサンとは、別に友達じゃなかつたんです。サチの知り合い…というか、あんまり…サチが、その…いじめてた子つていうか」「なにそれ」

「い、いじめつていうか…なんか、ちょっとサチがななみサンに甘えてるような…も、持ちかけたのはサチですけど、ななみサンだつて乗り気でした！」

「甘えつて都合いい言葉だね。君いい子ちゃんなんだね。まあ、いや。それで井坂妹とサチ？長瀬？は主従の関係にあつてこと？俺が聞きたいのは井坂妹が吐いてる嘘なんだけど」

ぐさぐさと突き刺さる言葉。ポロ、と皿の端から涙が出たが、かまわずに今井さんの問いに答える。

「嘘は…ななみサンが、靈能力者だつて、自称してて…く、暗かつたんです、彼女。それで、友達とかもあんましいなくて…それで、オカルトとか好きで、だから自分で靈能力者だつて…。それで、でも、本当はないつて…そう、ななみサンもかくれんぼの途中で言つてて…！」

「高校生が…まあ、いいや。で、その中二病を利用したつてことだな？長瀬が。まあある意味からかいだよね。井坂妹も強気に出たワケか。つーか、マジうけるんだけどさ、井坂が話す妹の話と全然違うな。これが嘘か？」

今井さんは首を傾げた。しかし、井坂サンのお兄さんと話が違うつて、どういふことだろ？。私も、訳がわからないという風に首をかしげて見せると、今井さんは腕を組んで椅子に背を預けて話す。

「井坂兄は自覚なしのシステムでな、妹のことをよく話すんだよ。システムフィルターかかつてんだろって思つて、そこそこに聞いてたけど、すごく明るくて聰明で友達も多くて、みたいなことを言つ

てた。嘘つてそれが？でも脈絡ないよな。そのIDからヒントないのかよ。コントロールFキーで検索かけるよ」

「ない、です…さつきから教えて欲しくて頼んでるんですけど…」

言われた通りにするけれど、ID：p99Td/NwOはそれ以降発言がなかつた。他のレスに散々なじられているせいかもしれないけれど。そのほかのレスは「実況しろ」だの「潜り込め」だの、無責任なことを言つている。そんな私の返事を聞くと、今井さんは盛大に息を吐いて、ノートパソコンを閉じ、その上に突つ伏した。

「はー…マジうつせえな隣。いい加減にしろよ…」

ひつくりなしに隣から何かを叩くような音が聞こえている。でもそれよりも何よりも、今は、今井さんが怖かった。隣の部屋の恐怖、今は塩を持った安全地帯にいる、という意識からかもしれないけれど。

無責任だな、私。ふと、そんな言葉が浮かんで、今井さんの言葉と重なつて、すこく悲しくなつた。

「さつきから気持ちが悪くてたまらないしセ…具合悪い…。水持つてきしよ、「ラップ適当に使つて」

「は、はい！」

「ちょっと塩入れてね。効果あるかわからんけど」

「はい！」

落ち込む手前に、今井さんが機嫌が悪そうに私に命じた。私はその要求に飛び上がるよう返事をし、すぐさま席を立つて、一枚ドアを隔てたミニキッチンに向かつた。片付けられたミニキッチンで、水切り棚に上げられた透明なグラスに水を注いだ。塩の入った瓶のキヤップを取つた時だつた。ぼそぼそ、と声が聞こえた。

はつとして開かれたドアの向こうを見ると、突つ伏したまま、顔だけこぢらに向けた今井さんが何か私に話しかけていた。びっくりするから、やめて欲しい。

「……で、井坂ななみは長瀬祥子にいじめられていた……うん? 長瀬祥子だっけか?」

「あ……はい、そうです」

「長瀬祥子、ながせわちこ……ながせ……さ、ちこ……人形の名前って、チコだつたよな?」

トンントントン…

トン、トントン…

さつきよりもずっと鮮明にあらゆる音が耳に入っている。隣の部屋のノック、そして、今井さんの声。鋭く刺さる。今井さんが、身を起こして私に聞いた。けれど、私は答えられない。そんな、そんな、まさか。今井さんの唇は、確信を付くかのように動く。ノートパソコンを再び開いて、すばやくキーボードを叩く。

「書き込み、なんて書いてあつた? 最初の、確かにいつ、髪入れたつて書いてあつたよな? 爪じゃなくて、リスクのある髪をわざわざなんで?」

トントン、トン…  
トン、トントン…

私は答えられない。私は、知らない。そんなこと知らない。知つてたら、そんな……サチは、サチはどうなる?

「井坂妹が願掛けしてたって本当か？爪を入れなかつたんじやなくて、髪しかいれられなかつたんじやないの？長瀬祥子の髪を。爪なんか、どうやって貰うんだよ。井坂妹は長瀬を嫌つてた、違うか？」

トン、トン、トン…

トントン、トン…

動機は十分。利用したと思ってた。違うんだ。利用されてた、としたら？嫌な汗が、背を伝う。音が、音がうるさい。うるさい。

トントン、トン…

トン、トントン…

「もしかして、井坂妹が人形につけた名前つて本当は、『長瀬祥子』じゃないか？もしくは『長瀬祥子と同等の意味を持つ名前』=チコ』とした。それが、井坂妹の吐いてる嘘だとしたら？」

トン、トン、トン…

トントン、トン…

「井坂は、長瀬祥子の身代わりである人形…長瀬祥子にもつとも近い存在に、再びおにじつこの宣言している。それって、まずくね？」

トントントン…  
トントン…

沈黙。汗。音。鋭い視線。問い掛け。そして、恐怖。  
私は、思わず、その場にずるずるとへたり込んだ。頭がくらくら  
とする。信じられない。怖い、怖い、怖い。これから、どうなるの  
？どうしたらいいの？私は、私たちが、本当に何か恐ろしいことを  
してしまったんじゃないかな。

そう思つた時だった。

ヴヴヴ…ヴヴヴ…

低い音が鳴る。ケータイのバイブ音だった。思わずびくりと身を  
ちぢこめて、パーカのポケットを触った。私のケータイじゃない。  
今井さんの方を見ると、今井さんは立ち上がりつて自分の黒いケータ  
イをじつと見ていた。そして、私に歩み寄り、私にそのケータイ  
を突きつけた。まぶしい画面、そこには、着信。

「愛川、この番号、知らない？嫌なことを、俺は、期待してるんだ  
けど」

今井さんの声が僅かに、震えていたことに気が付いた。私はすぐ

に、自分のケータイを開いて電話帳を探す。長瀬サチの番号、080-X-X3X-22XX…違う。じゃあ、じゃあ、井坂なみ。

「… それ、 ななみサンのケー タイ、 から… です…」

વવવ...વવવ

低いバイブ音が、鳴つてゐる。

一気に鳥肌が立つた。テレビの音が消え、その代わりに、ザ、ザ、ザーッ、ザザツ…と、不規則な砂嵐の音。それと共に、

トントントン…

トントン…

静かな音、ノックの音だ。少し前にも聞いた音だ。何かが、きている。来てる…！恐怖に、息が詰まった。ななみの携帯を手放して、一升瓶を取り、胡坐を書いた膝の中に埋めた。これがある限り、安全…安全か？亞種どころじゃないやり方をしているんだぞ？そもそも、保障なんてどこにもない。仮に今大丈夫だつたとしても、今後、どうなるかなんて誰にも分からぬじゃないか。…弱気になつていい。こんなんじゃいけない。

(イチバチ…)

頭の中に眩いで、息を吐いた。深く息を吸つて、落ち着け、落ち着け、言い聞かせる。

トントントン…

トントン…

音が遠くから聞こえる。少なくともこの部屋じゃない。ミニキッキン、廊下の方からか？まだ音は遠い。クローゼットの中は少し暑くて、肌が嫌な感じに汗ばんでいる。怖い…怖かった。

ふと、頭の片隅で、さつきのななみのメールを思い出した。あのメールを、一度見る勇気はなかつた。直感で状況は掴めた。だけど受け止められずについた。

これは、ななみが仕組んだことだつたのだ。

消す、意図的に、呪われる。明るい子だつた。明るくて、まじめで、いい奴だつた。それなのに、ななみ、なんで…ぐつと胸が締め付けられる。心が痛んだ。俺の信じていたななみが消えてしまつた。でも、まだこれが本当だと決まつた訳じやない。こんな、こんな日記、何か、勢いとか、何かの間違いとか…疑わないための言い訳。するだけ、空しかつた。悲しかつた。

トン、トン、トン…  
トントントン…

音が微かにでかくなつたような。ぱつと顔を上げた。俺が鬱つてちゃいけない。キッと強く気を張つた。

何もかも、無事にななみを助けてから聞けばいいじやないか。それで、話聞いて…それから、また、一緒にいろいろ解決すればいいじやないか。そのために、俺は負けちゃいけない。一升瓶の口をつかんで、そつと口に塩水を含んだ。異常なじょっぱさに吹きかけた。しかし、それを堪えて口の中に少し塩水を貯めて、そつとドアを開け、覗き見ることにした。

トン、トン、トン…  
トントントン…

さつきより、音が近い。そつと、そつとドアを押す。開けすぎればバレる。音も立てずに、そつと、そつと。

キイと、小さな音が立つてドキリとした。大丈夫か?バレてない、

よな……。僅かな隙間に、片目をそっと寄せる。

「……ひ……」

寄せた瞬間、驚愕と恐怖が悲鳴をあげそななるが、あわてて自分の手で口を押さえた。そこにはいる。いたのだ。

部屋の中央、電灯の真下に黒い影が、影が、影が立つていて。よく見えない。怖い、ノックの音、心臓がうるさい。その真っ黒な人影は、真っ黒な長い手で、手でテーブルを叩いている。気味が悪い。トン、トントン……トン……こいつが、そこらじゅう探し回っている音だつたのかよ、このノックの音つて……視線は、影に釘付けになつていた。恐怖で、体が、目が、手が、固まつてしまつていて。

よく見るとその黒いの中に、更に輪郭を持つていて。影は後ろを向いている？ 亂れた髪が微かに見える。なな、か？ 違う。ななの髪はもつと長い。そうしたら、これが、長瀬か？ しかし、よく見えない。目を凝らす、薄ぼんやりとしか見えない。ましてや、暗闇の中だ。もつと、もつと、何か……何か。

そう思つた瞬間だつた。思わず、ドアをくんつと押してしまつたのだ。ギイ、とはつきりした物音が立つ。やばい、そう思つた時は遅かつた。

トン、トン、トン……

ノックが止まる。長い黒い手が、ぶらん、と下げるれると同時に、首が、頭がこちらに、ゆっくりと振り向いた。

人だと思つてた。でも、その顔は人間の顔をはい難い、何かの動物のような顔だつた。その口が、口が、にたりと笑つた。赤い口

が弧を描き、心臓が恐怖にぐっと縮こまり、しまった、とドアを慌てて閉めようとした、刹那、その影がものすごい速さで俺の方向に飛び掛ってきたのだ。

「ツ、あああツ！？」

一瞬、その顔を見た。猫だ。猫の顔だ。いや、猫の顔じゃない。猫と人間を奇妙に組み合わせたみたいな顔だった。恐怖に叫び、口の端から塩水が零れ落ちた。夢中でドアを閉めるも、間に合わない。ガツ、と音を立てるドア。それは閉まりきらない。黒い影の手が、長い手の甲がドアに挟まっている。黒い影を纏う、白い手が、挟まっている。俺は夢中でドアを閉めようとするが、その手がギチ、ブチッと音を立てる。細くて華奢な指がくねくねと動く。それは、人間の持つ手の動きじゃない。しかし、確かにそれは質量を持つている。嫌な予感がする。もしかして、こいつ、長瀬か？その指の影は伸び足り縮んだりして、俺に手を伸ばそうとする。

俺は恐怖を堪えて、ドアを閉めつつ、一升瓶を取つて、その塩水に黒い手に引っ掛けた。とたんに、すっと黒い手が消え失せた。しめた！すぐにドアをがつちりと閉めて、息を吐いた。しかし、居場所はバレている。見つかっている。これでも、セーフなのか？とりあえずは、無事だ。なんでだ？荒い息を整えつつ、塩水をまた口に含み、口の回りをクローゼットの棚の中のタオルで適当に拭いた。

しかし、その直後に、また、音。

トン、トン、トン…  
トンントントン…

これは、影が、鬼が、俺を探す音。  
それは、このクローゼットのドアを叩く音だ。見つかっている。  
俺が出てくるのを、待っている……？

確かに感触があった。あれは人の手の感触、確かに質量を持つた……でも、違う。あれは人間でもない。恐ろしさに体が震えていた。怖い！怖い、この状況で外に出るとか、無理だろ！クローゼットの中で膝を抱えて、体の震えを抑えようとした。落ち着け、落ち着くんだ。思うほどそれは空しい。音が…あの俺を探す音がすぐ近くでするといふのに。それにしても何で、何で入つてこないのか？実体があるってことか？見つかっているのに、入つてこれない理由はなんだ？実体があるとするなら、あれは誰だ？長瀬なのか？そうしたら、ななは？ぐるぐるといろいろな思考が頭の中で駆け巡るが、何一つとしてピンと来ない。いや、頭の中を引っ搔き回すだけで、明確な回答を導き出せるほど綺麗にまとまっている訳ではない。ただの現実逃避かもしれない。怖い、といふ感情が勝る。

トン、トン、トン…  
トンントントン…

すぐ近くで、耳元でそのノック、テレビの砂嵐。ザーザーといふ音は、不安を煽る。だからと黙つて、他にどうしどうつんだ。その時だった。

『もしもし…』

微かな声が聞こえた。心臓がドクンとなつて、振り返る。そこには、画面が光つていてるななみの携帯だった。思わずその携帯を手に取る。通話時間、04秒、05秒とデジタルの数値が指示示す。

『もしもし…』

「今井……！？」

思わず塩水を飲み込んで小さく叫んだ。やばい！と思つたが、相変わらず後ろからはノックの音だ。大丈夫なようだ。携帯を耳に当てて呼びかける。

「今井！？今井か！？なんで、電話通じたのか！？」

『知らないよ、君からかけたんじゃないの？』

「かけてねえよ！今、見たら、ななの携帯、ついてて……」

『言つべきか。今の状況を。ななが、もしかしたら、長瀬を……って？一瞬の迷いは、今井の言葉にかき消された。

『まあいいよ、落ち着いて聞け。君が指した人形、もしかしたら、長瀬祥子かもしれない』

ぐさり、と言葉が突き刺さる。疑つていたこと、疑いたかったこと。それがクリアに見えてきていた。声が出なかつた。

『色んなことはハブく、察せ。ともかくその人形自体が、君の妹によつて長瀬の身代わりになつていて。ひとりかくれんぼつて、要は呪いの説が高いんだろ？名前をつけた人形に、自分の体の一部を入れて自分自身に呪いをかける。それをすべて君の妹は、長瀬の名前、長瀬のもので行つた。つまり、君の妹が長瀬に呪いをかけたんだ。ひとりかくれんぼの儀式にのつとつて』

「……な、んで、妹が……ななが、そんな」

『そんなのテーマの妹に聞け。あくまで憶測だけどな、不自然な点が多いんだよお前の妹。嘘ついてばつかだし』

嘘ついてばかり。

きつと、ただこの今井の言葉だけならば俺はそれを信じなかつただろう。しかし、ななの日記を見てしまつた。確かな、確証を見つけてしまつたあとだ。かばい切れず、悔しくて…ぐつと喉元から何かが競りあがつてくるような感覚がした。

「…たぶん、そうかも。俺も、そんなん、見つけたから…」

『そう、なら話は早いな。長瀬はもうヤバイかもしれない。呪いの発生がナイフを刺すことだとしたら、2回だ。繰り返し、長瀬は呪いを受けてる。形式的に見てみても、助かる見込みは低いな』

「待てよ。待て。じゃあ、え?どういうことだ?」

『…ひとりかくれんぼは、自分自身を呪うわけだ。だから本来、妹が儀式を行う場合、人形イコールお前の妹つてことだ。それを通常通り終わらせられていれば、妹は自分にかけた呪いを終了宣言で呪いを解くよな?私の勝ちつてやつだ。でも、今回は人形イコール長瀬だ、妹が人形に終了宣言したところで、長瀬への呪いは解けずにそのままだ。しかも、今回はあらうことがしくじつたんだろ。君の妹は長瀬に捕まつた』

「そしたら、え?長瀬は?長瀬は鬼から開放されるんじゃないのかよ?長瀬はさつきこの部屋にいた、変な…化け物みてえな…見たんだよ、ほんと!今、後ろ、叩かれてんだよ…!」

必死に言つと、うるせえと一喝されてしまつて、思わず黙る。

『かくれんぼの明確なルールつて知つてるか?俺、さつきwikiで調べたんだけど』

「え?」

今井は淡々としゃべつた。場違いなくらいに、その声のリズムは明快だった。

『鬼は子供を見つける。一番最初に見つけられた子供が鬼になる。

それが、自分と自分の分身でやるわけだから、ひとりかくれんぼ。でも今回は実質2人でやつてるわけだ。自分じゃない、他人を呪うことによって。長瀬が鬼で、妹が一番最初に捕まつた』

「つづーことは、俺が部屋に来た時点では、ななが鬼だったのか

『しかし、君が割り込んで宣言をする。俺が鬼だつて』

「一回目の宣言か？ あれは無効だ！ 3人で、鬼をするつて

『ここからは憶測だよ。でも、かくれんぼの形式にのつとるのなら信憑性は高い。いいか？ 見つかった2人目以降の子供は、鬼にはならない。ただの子供になつて、また隠れるんだよ。かくれんぼの鬼はいつだつて、必ず1人だ。つまり、3人が鬼の宣言はでたらめで、無効だつたつてことなんだよ』

「…つ！」

そんな、と声を声にならない声が出た。

今井はその声にさえ、反応しない。冷たく話す。

『君が割り込んで、鬼になる。鬼の君は、長瀬イコールの人形を刺し、鬼とする。でも、実際、隠れるべき子供は2人だ。言つてる意味わかる？ 鬼の役目は1人探して終わりじゃない。2人、つまり全員見つけて始めて終わるんですよ。だからこの理論でいけば、君はまだ鬼なんだ。妹を探さなきゃいけない』

たしかにかくれんぼのルールはそうだつた。一番最初に見つかつた子供が鬼で、それ以降に見つかつた子供は次のかくれんぼが終われば隠れる。しかし、全員見つけない限り、かくれんぼは終了しない。だから、そうか。さつきの長瀬みたいなヤツを俺を見つけても何ともならなかつたんだ…俺がまだ、鬼だから。

「……じゃあ、ななは、まだ……」

『隠れているはずだ、どつかに。君の近くにいる長瀬ヒヤリは、おそらく見つかったから出てきただけでしょ。妹を探して「みつけた」つて宣言すればいい。そうすれば、最初に捕まえられた子供の長瀬に鬼の権利がいく。そうしたら妹を隠して、君が儀式を終了させる。今、焦つて終了させたら、妹の行方がマジでわからなくなるぞ。憶測だけどな』

しかしそこでひとつ、疑問が生まれた。

「ちよつと待てよ。じゃあ、なんで俺がこの家に帰ってきた時点で、長瀬までいなんだよ。ななを見つけた長瀬は鬼から開放されたはずだろ！」

『長瀬自体が呪いの発生源にされてんだ。つまり、本当に長瀬イコール人形って考えた方がいい、呪いの発生源がそう簡単に開放されると思うか？』

「……」

長瀬が呪いの発生源だとしたら、この場に縛り付けられている。終了宣言をしてあの人形を儀式から離脱させない限り、長瀬も…ってことか。

そうしたら、早いところななをみつけなければならぬ。しかし、

「見つけるつて、どうやって…」

『分からぬよ。あとは自己責任でやつてよ、俺は知らない』

『長瀬は、どうなるんだ…』

『鬼の状態で強制終了食らうんだから…ただでは済みそうにないね』

「そんな…」

『…君が長瀬に同情してタイムアップまでそこにいるのは自由。か

くれんぼのルールにあるんだけどね、見つからないで夕暮れがくれば、かくれんぼは中止。なぜなら、神隠しに合図から。君もそういうたいの?』

制限時間ルールはそこから來てるのか…!

冷や汗が背中に流れた。妹を救えるかもしない、という期待と、長瀬の末路への不安。助かる道を選びたい、もちろん。しかし、だけ…。

『助かりたいって思うことがエゴだつて思うわけ?頭ん中、平和だね。じゃあずつと悩んでれば?あとに何ひとつ残らないし、君自体いなくなれば、しなかつた後悔だつてせずに済むかもしれないしね。それがいいかもね』

「今井」

『はい?』

「ありがとう」

『…包丁返してね、買つて』

「おう

しない後悔より、する後悔か。何ひとつ残らないことよつ、何かひとつでも残したい。遠まわしに罵りつつそれでも背中を押すような今井の言葉は、俺にとつては十分だった。

「一応、電話つけっぱなしとくが」

『え、こつち来られるとか困るから無理。切るよ、とよなら』

「あつ…え? オイ!』

静止を入れる間もなく、ブツッと電話は切られた。ひどい。表示された妹の待ち受け、その上には圏外の文字。一瞬だけつながったそれを不審に思いつつも、俺は決心をした。俺が鬼だ。ななを見つ

けて、そして必ず、このかくれんぼを終つたから。

二二二

一升瓶を一本、しつかりと手に持ち、音のするクローゼットの扉をゆっくり、ゆっくりと開いた。

「ひ……！」

思わず声を上げかけた。目の前には真っ黒い、塊だ。真っ黒い塊から真っ黒い手が伸びている。これはなんだ。これはなんなんだ！頭の中で問う暇もなく、その黒い手が俺に伸びてきて、俺はすかさず持っていた一升瓶の中の塩水をその手にひっかけた。すると瞬時にその手がびくびくと痙攣し、小さくなっていく。小さく？いや、黒い塊の中へ入っていく。なんだよこれ、さっきまで人みみたいな形をしていた癖に、今はただの塊になっている。萎んだ右腕がそこから生え、ぐによぐによとグロテスクに蠢いている。ぞつとして血の気が引く思いながらも、俺はななを探すこととした。黒い塊に注意しながら、周囲を見回す。

(隠れるも何も、1Kの部屋なんて隠れるところに限度があるからな)

まず、意思があつて隠れているのかどうかすら分からぬ。隠れるとしたら？まずクローゼットの上のロフトを見てみるが、人影はない。ロフトに上がって、布団をめくつてみるけれど、いない。こじじゃない。違う。と、ふと下にいる黒い塊を見た。見た、じゃない。違う。田が合った。

「ひつ……」

さつきまで確かに人の形をしていて、急に塊に…なんて、思つていた。しかし、違うのだ。その塊の表面は、何かビニールのよう、ツルツルとした透明な皮のようで、その中に、人が入つているのだ。

体や首を奇妙に折り曲げてそこにいる。顔が、奇怪な形に曲げられた首と顔。それがにたり、にたりと笑う。

トン、トン、トン…  
トントントン…

それが笑いながら、再び、クローゼットのドアを叩いている。そこらへんにあるものを適当に叩いているのだろうか。『気持ち悪い怖い。思わず、後ずさつた。手は再びぐにゃぐにゃと伸び、関節を完全に無視して自由に動いている。胃から何か競りあがつてくるような気持ち悪さを覚えてすぐに田を逸らした。ロフトから飛び降りて、廊下へ出る。

そうしたらトイしか。これも個室だから、とドアを開けるが静まり返っている。何もない。そうしたら、次は風呂場、と、さつと体を動かして風呂場を覗き込んだ時だった。

（え…）

ない。  
ない、ない…ない。

なくなっている。あのティベアが。包丁も消えている。確かに刺して、ここに。

さつと血の気が引いていく。汗が、今までにないくらいだらだらと流れ。汗をかいだ足の裏が、少し滑る。

トン、トン、トン…  
トントントン…

これで無事にななを見つけられたとしても時間内に人形に塩水を

かけなければ意味がない。その人形は、風呂場にあるとばかり思つていたのに、ない。そうだ、人形は移動をすると言つてはいた。どうするんだ、どうすればいい。いや、違う。それよりもまずななみだ。はやる鼓動で全身が揺れているような気がする。落ち着け、なんて言葉はまるで役に立たない。それに、そうだ。

風呂、トイレ、ロフト、そしてクローゼット。ここ以外に人が隠れる場所なんてこの家にはないのだ。だとすれば、ななみはどこにいる？違う、ななみはどんな形でここに存在しているんだ？

ななみが消えてから約2日、その間は、いつたいどうしていた？ななみは結局、儀式を終了されなかつた。儀式が終了しないままに时限で強制終了を食らつていた。时限切れイコール夕暮れのかくれんぼのタブー、それが神隠しとするならば、ななみはやはり、実体として隠れてはいなか？だとしたら、どうやって探せばいいんだ？

心の片隅に留めていた疑問が、実体としての存在への希望を打ち碎き、絶望として広がる。実際、どうだよ。俺は、今、ヤツに見つかっても平氣でいる。そうしたら、やはり鬼の権利は俺にあるままという理論は正しいということだ。それなのに、ななみが見つからない。なながどこにもいない。いたとして、それは実体を持ち得ない、いわば幽霊のようなものなのか。ぞつとした。それをどうやって探せばいい？だらだらと冷や汗が流れる。どうしようもない、本能が訴えかける。でも、投げるわけにはいかない。大事な、妹なんだ。

靈的なものを見つける場合はどうしたらいいんだ？そんな方法はぱつと出でこない。何か、何かないのか。焦る。初めから詰みかよ、悪態をつきながらポケットにいれていた自分の携帯を見る。4時52分、タイムリミットあと30分。冗談じゃないぞ、何一つし

ないまま、俺まで隠されてたまるか。何か、手がかりはないか。必死で考えて、考えてそして、ふと、ある出来事が頭を過ぎた。

「 そういう、あの携帯電話…なんで勝手についたんだ？」

はつとしたのとほぼ同時に、動いていた。もしかして、もしかしたら！ 黒い塊がまた手を伸ばしてきた。それに塩水をかけて、それを振りほどきクローゼットの中に急いで入った。ななみの携帯電話の待ち受けが煌々と光っている。そうだ、さっきまで無人だつたはずのクローゼットなんだ。ついてる筈ねえんだよ、電源が。それに、あの黒い塊がこんなにこに固執してゐるのも、もしかして、もしかしたら…！ クローゼットの片隅、ななの携帯が置いてある他、何もない空間に俺は叫んだ。

「…っ、井坂ななみ！みーつけた！」

すると、どうだろう。すつと、不透明なものが見える。ななみだ。ななみがいる。不確かだけど、確かに見える。ななみは目を瞑り、眠つてゐるようだつた。嬉しさが押し寄せるが、ぐつと堪えて、続け様に再び叫んだ。

「 次は、チコが鬼！」

「ひ……！」

思わず声を上げかけた。目の前には真っ黒い、塊だ。真っ黒い塊から真っ黒い手が伸びている。これはなんだ。これはなんなんだ！頭の中で問う暇もなく、その黒い手が俺に伸びてきて、俺はすかさず持っていた一升瓶の中の塩水をその手にひっかけた。すると瞬時にその手がびくびくと痙攣し、小さくなっていく。小さく？いや、黒い塊の中へ入っていく。なんだよこれ、さっきまで人みみたいな形をしていた癖に、今はただの塊になっている。萎んだ右腕がそこから生え、ぐによぐによとグロテスクに蠢いている。ぞつとして血の気が引く思いながらも、俺はななを探すこととした。黒い塊に注意しながら、周囲を見回す。

(隠れるも何も、1Kの部屋なんて隠れるところに限度があるからな)

まず、意思があつて隠れているのかどうかすら分からぬ。隠れるとしたら？まずクローゼットの上のロフトを見てみるが、人影はない。ロフトに上がって、布団をめくつてみるけれど、いない。こじじゃない。違う。と、ふと下にいる黒い塊を見た。見た、じゃない。違う。田が合つた。

「ひつ……」

さつきまで確かに人の形をしていて、急に塊に……なんて、思つていた。しかし、違うのだ。その塊の表面は、何かビニールのよう、ツルツルとした透明な皮のようで、その中に、人が入つているのだ。

体や首を奇妙に折り曲げてそこにいる。顔が、奇怪な形に曲げられた首と顔。それがにたり、にたりと笑う。

トン、トン、トン…  
トントントン…

それが笑いながら、再び、クローゼットのドアを叩いている。そこらへんにあるものを適当に叩いているのだろうか。『気持ち悪い怖い。思わず、後ずさつた。手は再びぐにゃぐにゃと伸び、関節を完全に無視して自由に動いている。胃から何か競りあがつてくるような気持ち悪さを覚えてすぐに田を逸らした。ロフトから飛び降りて、廊下へ出る。

そうしたらトイしか。これも個室だから、とドアを開けるが静まり返っている。何もない。そうしたら、次は風呂場、と、さつと体を動かして風呂場を覗き込んだ時だった。

(え…)

ない。  
ない、ない…ない。

なくなっている。あのティベアが。包丁も消えている。確かに刺して、ここに。

さつと血の気が引いていく。汗が、今までにないくらいだらだらと流れ。汗をかいだ足の裏が、少し滑る。

トン、トン、トン…  
トントントン…

これで無事にななを見つけられたとしても時間内に人形に塩水を

かけなければ意味がない。その人形は、風呂場にあるとばかり思つていたのに、ない。そうだ、人形は移動をすると言つてはいた。どうするんだ、どうすればいい。いや、違う。それよりもまずななみだ。はやる鼓動で全身が揺れているような気がする。落ち着け、なんて言葉はまるで役に立たない。それに、そうだ。

風呂、トイレ、ロフト、そしてクローゼット。ここ以外に人が隠れる場所なんてこの家にはないのだ。だとすれば、ななみはどこにいる？違う、ななみはどんな形でここに存在しているんだ？

ななみが消えてから約2日、その間は、いつたいどうしていた？ななみは結局、儀式を終了されなかつた。儀式が終了しないままに时限で強制終了を食らつていた。时限切れイコール夕暮れのかくれんぼのタブー、それが神隠しとするならば、ななみはやはり、実体として隠れてはいなか？だとしたら、どうやって探せばいいんだ？

心の片隅に留めていた疑問が、実体としての存在への希望を打ち碎き、絶望として広がる。実際、どうだよ。俺は、今、ヤツに見つかっても平氣でいる。そうしたら、やはり鬼の権利は俺にあるままという理論は正しいということだ。それなのに、ななみが見つからない。なながどこにもいない。いたとして、それは実体を持ち得ない、いわば幽霊のようなものなのか。ぞつとした。それをどうやって探せばいい？だらだらと冷や汗が流れる。どうしようもない、本能が訴えかける。でも、投げるわけにはいかない。大事な、妹なんだ。

靈的なものを見つける場合はどうしたらいいんだ？そんな方法はぱつと出でこない。何か、何かないのか。焦る。初めから詰みかよ、悪態をつきながらポケットにいれていた自分の携帯を見る。4時52分、タイムリミットあと30分。冗談じゃないぞ、何一つし

ないまま、俺まで隠されてたまるか。何か、手がかりはないか。必死で考えて、考えてそして、ふと、ある出来事が頭を過ぎた。

「 そういう、あの携帯電話…なんで勝手についたんだ？」

はつとしたのとほぼ同時に、動いていた。もしかして、もしかしたら！ 黒い塊がまた手を伸ばしてきた。それに塩水をかけて、それを振りほどきクローゼットの中に急いで入った。ななみの携帯電話の待ち受けが煌々と光っている。そうだ、さっきまで無人だったはずのクローゼットなんだ。ついてる筈ねえんだよ、電源が。それに、あの黒い塊がこんなにこに固執してのも、もしかして、もしかしたら…！ クローゼットの片隅、ななの携帯が置いてある他、何もない空間に俺は叫んだ。

「…っ、井坂ななみ！みーつけた！」

すると、どうだろう。すつと、不透明なものが見える。ななみだ。ななみがいる。不確かだけど、確かに見える。ななみは目を瞑り、眠っているようだつた。嬉しさが押し寄せるが、ぐつと堪えて、続け様に再び叫んだ。

「 次は、チコが鬼！」

ぞわつと鳥肌が立つ。一瞬だった。何かが冷たいものが体を駆け抜ける気がした。吐き気がする。クローゼットの外で待つ、鬼。隔てたのはたつた一枚の板。恐怖、あの長瀬だったものが頭の中によぎつた。それでも目の前には妹、守らなければならぬ、守りたい、その一心だった。続け様に、大きく声を張り上げる。

「いーちー！」

カウントを鬼が自ら取るのかわからない、でも時間が欲しい。自らカウントを出しながら、手を動かす。これがアウトだったら、笑えるけれど。

「いーいー！」

「ンンンン、とそこいら中を叩く音が消えている。しめた、思いながら、一升瓶の蓋をあけた。

「さーん！」

なるべく言葉を伸ばして、時間稼ぎをする。大きな声で言つ。万が一の時、今井にも聞こえるようにだ。

「しーいー！」

一升瓶の中の塩水を妹の頭からかけた。

「いーおー！」

手足からつま先まで万弁なく。そこには適当にしまわれていた小さなハンカチを破いて、それに塩水を含ませた。

「うーくー。」

塩水を含ませたハンカチをななみの口に無理やり突っ込んだ。どれほどの効果があるかは、期待できないが。

「なーなー！」

口を閉じさせて、あとは時間を待つ。俺の声だけが響く、無音。しんと静まり返った部屋が、帰つて恐怖を煽つた。

「はーちー！」

言葉が震えている。音がしない分、自分の心臓の音が鮮明に聞こえる。うまくいく、だろつか。

「きゅーうー。」

成功したつて、もしかしたら、長瀬が、頭を重苦しく過る問答。だけど、だけど…ななみを見た。苦しげに眉根を寄せている。駄目な奴だ、本当に。

俺どころか、人様まで巻き込みやがつて、嘘ついて。それでも、

「じゅーうー。」

たつた一人の妹だから。  
俺が守つてやるからな。

一際大きく、俺は叫んだ。

「もーう、いーよー！」

瞬間だつた。

ベチン、ペチン、カタン…  
コンツ、ベチン…ガタツ…

トン…とさつきまで鳴っていた音は、不規則で、何かもつと生々しい音に変わつた。何を打つてる？ どこらへんにいるんだ？ 音を聞いて、大体の位置を把握しようも、音がでかい。

コン…ベチッ、トン…  
ガシヤつ、ベチ…

何を叩いてる？ 何で叩いている？ まったくわからない。

が、臆している時間もない。タイムリミットも、近い。時間切れは神隠し、暗い闇の中へ葬り去られる訳にはいかない。生睡をゴクリと飲んで、そして、一升瓶に口をつけ、塩水を口に含んだ。残り少なかつた一升瓶の中の塩水を、すべて口に含み、空になつた瓶をななみの隣に置いた。最後の塩水は、塩がそこにたまつており、信じられないくらい塩辛く、思わず噴き出しそうになつところをぐ

つとこらえた。

強制終了、させぬしかない。

(なな、兄ちゃん、行ってくつかんな)

塩水を口に含んだまま、ななの長い髪を撫でた。

最悪、死ぬかもしれない。けど、しない後悔より、する後悔だ。

そつと膝立ちになり、クローゼットを開けた。

思わず、口を押さえた。黒い塊は、窓際にいた。淡い街灯の光を受け、グロテスクに光り、辛うじて丸いと言えるような歪な黒い塊から長い腕を2本生やし、それでそこら中を叩いているのだ。叩いている、というより、打ちつけている。ダランと垂れ下がった右腕で、ベチンベチンとそこら中を叩き周り、もう一つの腕と手で、床をはいづる。重そうなその黒団体を引きずつて、

ベチン、ペチン、カタン…  
コンツ、ベチン…ガタツ…

引きずつて、俺を探している。

しかし、時間もない。俺は声をあげてしまわないように、口を手で押さえたままそつとクローゼットから出た。

コン…ベチツ、トン…  
ガシャツ、ベチ…ベチツ…

黒い塊に、十分注意をしながら、人形を探しに廊下に出た。

最初に探しに出た時は、風呂場にいなかつた。すると、他の場所か。めぼしい場所は、どこだ。そんなのわかるわけないよな…地道に、声あげないよう、探し…

(…あつた)

しかし、思いの他、人形は単純なところにあつた。

クローゼットを出て、すぐ左にある、短い廊下。風呂場の前。そこに置いてあつた。心臓がドキリと鳴つた。驚きに？嬉しさに？それともこの、簡単に見つかってしまう場所にあつたことへの恐怖？ため息をつきたいような感覚に駆られたが、口の中には塩水。これを吹きだしたら一瞬にして終わりだ。

カタツ、ベチツ！…カラソ…  
ペチ、ペチ、バチツ…

窓際を這いする黒い塊を見た。が、やはりこちらには見えていな  
いようだつた。

人形に駆け寄つて、今すぐに終わらせてしまいたい！が、不用意に大きな物音を立てるのも憚られる気がして、鼻で大きく息を吸い、  
出す。ゆっくりとその人形に近づく。

カン、カン、たんつ…  
ベチツ…ペчин…

背後に不気味に聞こえる音を感じながら、人形に近づく。人形は水にぬれて、その周辺には小さな水たまりができる。その水上に、人形に巻かれた赤い糸の端が浮かび、ゆらゆらと微かに揺れていた。

### 「終わり方」

- 1 塩水を半分口にふくみ、隠れてる場所から出て、ぬいぐるみを探す（途中で塩水吐かないよう注意）
- 2 ぬいぐるみを見つけたら、残りの塩水をぬいぐるみにかけて、口の中の塩水も吹き掛ける
- 3 『私の勝ち』と3回言つ

頭の中で、終わり方を確認した。

ぬいぐるみを見つけた。塩水の残りはなし。だから、口に入れた塩水を吹きかけて、俺の勝ちって、3回言えれば…言えば、終わりだ！

しかし、その時だつた。

カタツ…カタン…！

さつきとはもっと近いところで音がした。気付かれたかと、反射的に後ろを振り返ると、そこには。

（あ…）

クローゼットのドアが開いていた。

なんで、なんで、なんで。そこから、そこのところから、ななが、ななみが顔を、出している。不安げな目で俺を、俺を、見て、そのままの後ろに、ななみは気づいてない、立っている、人が、黒い人

が、女が立つて、立つて、ななを、ななが、

叫んでいた。

「ななみ！」

叫ぶと同時に、口から塩水が噴き出た。その瞬間、ななを見ていた黒い女が、女がすごいスピードで俺のところへ、来て

女が俺の前で大きく何かを振り上げた。一瞬、恐怖で腰が抜けて、尻もちをついて、そうして、その時に、光の加減でその何かが見えたのだ。

包丁。

反射的に腹をかばおうとして、背を向いた。その背に強い痛みが

走つた。

「ああああああああああ！」

痛い、痛い痛い痛い！想像を絶する痛み。生温かい血が、背中から腰、腰から腹へ、腹へ、床に、水たまりへ、その水たまりに突つ伏した。目の前には、人形の足。赤い、赤い糸が揺れて、

後ろからはななの叫び声。そして、それと違つ声が、うめくような声が聞こえる。

い…いいい…ぎつ、ああか…ア

その不自然な音が、俺の名前を呼ぼうとしている。見つけたという、宣言をしようとしているんだ！頭の中がパニックを起こしていった。駄目だ、そなことしたら、今度は俺が…違う、その前にタイムリミットが来てしまう。

思わず、やめる、と言いかけた口に、水たまりの水が入ってきた。が、それが、

（これ…微かに、しょっぱい…？）

さつき塩水を噴き出してしまった時に、おやりく、この水たまりにも塩水がかかつたんだろう。俺が最後に口に含んでいた塩水は相当な濃度だった。だから、きっと、もしかしたら…！

痛む背中をこりえて、顔をあげた。そして、声を振り出した。

「井坂、弘毅のつ…勝ちつ…」

「ゴシ、ゴウ…ウウウウア、キ…つ

背後の女も声を上げる。何を言つてゐるか、聞き取れない。聞き取れない、気にしている場合ぢやない。女より、先に、3回、言わなければ、ならない。

「これかつ、これかの…かち…」

意識が朦朧とする。口が回らない。女のうめき声と妹の泣き叫ぶ声が頭に響く。口の中が、塩っぽい。あと、一回。

「こ、とか…」一聲、のつ…か、

黒い影が、すづつと伸びて行く。

『みいつけた』

今日は、井坂サンのお見舞いに行つたあと、今井さんの家に寄つてから、家に帰つた。

あれからもう、どれだけ立つだらう。

タイムリミットになり、いつこうに音沙汰のない隣の部屋に今井さんの命令で行つたのは明け方6時を過ぎていたと思う。朝日がさし、すっかり明るくなつていて、すんなり入ることができた。

そこに井坂サンのお兄さんがうつ伏せに倒れていた。隣には白い白い袋と、それに突き刺さつた包丁があつた。私は思わず叫びそうになつたが後ろからついてきた今井さんが、静かにゆつべつとお兄さんに近づき、搔つた。

「おー、井坂。井坂、起きる。まかやるわ」

死んでいるのではないか、と思つた。でも、お兄さんはピク、ピクと微かに動いた。

生きてる、と安心したのも束の間、奥の部屋、ドアを隔てて向こう側から高い笑い声が聞こえた。

「なに? 起きる、井坂」

「せ、なか…」

「背中? いじから起きてよ後ろの部屋になにかこまよ起きる?」

お兄さんはゆつべつと起き上がる。しかし、笑い声は止まらない。

「こま…こ…？」

「おめでとうって言いたいところだけど、後ろの部屋。後ろの部屋が無事じゃない見てこい」

「え…？俺、失敗…俺、宣言する前に、背中…」

「いーから行けって言つてんだろ！怖いからー…あれー！」

部屋の明かりがついたり、消えたりしている。笑い声が聞こえる。けたたましい、物音も。

井坂さんは、背中をさすって首をかしげている。背中をどうにかしたのだろうか。井坂さんは少し様子をうかがって、そうして慎重に部屋のドアを開けた。

そこには、

けけけけくけてえええあけけつけけつけけつけけけ  
けけけけけけあけけてあけてあけああああああああ  
あけあけけけ

黒い髪を振り乱し、口から涎を垂れ流し、狂ったように笑う井坂サンがいた。

部屋は凄惨な様子、そこには…あまり思い出したくない、水や、汚物や…いろいろな…。

「なな…？」

お兄さんは、かすれたような声を出して、ゆっくりと井坂サンに近づいた。井坂サンはお兄さんを見るなり、今度は、イヤーッ！イ

ヤアアアアアッ…と田畠に顔をあげて、後ずさる。

「なな…なな…」めんつ…！」

逃げる井坂サンをお兄さんが捕まえて、抱きしめる。お兄さんは、静かに静かに背中を震わせていた。お兄さんに抱きしめられた井坂さんは、奇声を放つて、お兄さんから逃げようとした。

それでも、お兄さんは井坂サンを抱きしめたまま、静かに泣いていた。

お兄さんの話によると、お兄さんは一度強制終了をし損ねて、チ「に…サチに背中を刺されたらしい。それでも負けじと強制終了の言葉を放ち、強制終了に成功し、そして、氣を失つたようだつた。

そして、田が覚めたら背中は無事。刺された痕跡もない。そのかわり、その隣には白い袋…合格祈願と書かれた白い袋に包丁が刺さつた状態であつた。

それはお兄さんに今井さんが「冗談で渡したものらしいが、今井さんが気になつてそれをくれた人…今井さんの祖母にあたる人に話を聞くと、靈感が強い今井さんを心配しておばあさんが用意してくれた魔除けのお守りらしい。ただし、今井さん自身がそういう類を持ちたがらないタイプなので、合格祈願の袋に差し替えて持たせておいたということだった。そのお守りが、井坂さんの身代わりをしてくれたんじやないかと、お兄さんは話していた。今井さんは気に入らなそうにしていた。

井坂サンは、おかしくなつてしまつた。

学校を辞め、病院に入院している状態になり、ほとんび…ほとんど、まともな言葉を話さなくなってしまった。お兄さんと、ご両親の間で井坂サンの「ことについてどのよつなやり取りがあつたかはわからない。けれど、お兄さんは今まで惨事の起こつた301号室に住み続け、定期的に実家に帰る生活を送つていた。大学も続けているけれど、今井さん曰く、あまり来てはいらないらしい。

長瀬祥子は、その日の晩からいなくなつてしまつた。

サチは、割と素行の悪いタイプで、最近知つたけれど、家に帰らない日も多々あり、家族は特に心配していなかつたようだ。それでも学校側がいつまでも登校しない日が続いたサチを不審に思い、家族に通告。そして、サチが消えてから11日後、K県F市の女子高生がいなくなる、というニュースが報道された。私も事情聴取を受けたけれど、今井さんの言つとおりに、知らぬ、存ぜぬを貫き、5月26日は、元彼である今井さんの家にいた。そういうことになつていて、今井さんもそう証言してくれた。

お兄さんは、私を責めなかつた。

決して、起こつたり、私の前で泣いたり、しなかつた。罪悪感で死にそうだつた。今井さんには、死ね、と言われたけれど、いつそう言つてくれた方がいいのに、と泣いたら、死んで欲しいくらい迷惑だけど、どうせ死ぬなら井坂と俺のためになることを罪滅ぼしだと思って一生してから死ねよ、とも言われた。それを聞いたお兄さんも、じゃあ俺たちの飯を作るといいよ、なんていうものだから、私はまた泣いてしまつた。

犯した罪は、償わなければならぬ。こんなことで償えるものではないけれど、できることからしてくれればいいとお兄さんが言つてくれた。

そうして、それからほとんど毎日。

学校が終わると、井坂サンの病院にお見舞いにいき、やつして、今度は今井さんの家に行つて夕飯を作つた。できるところから、はじめなければならなかつた。そんな日々を過ごしていた。

「…あれ？ ただいまー？」

22時を回つたくらいに家に着くも、家の玄関の電気がついていない。いつもならついているのに。おかしいな、留守？ そう思いつつ、扉に手をかけるも、簡単に開いてしまう。鍵、開いてるし。物騒だなー。

そう思いつつ、家に上がり、ドアを閉めた。しかし

「あれ…？」

電気がつかない。パチン、パチンと何度も付けてみるけれど、まったく付かない。おかしいな、と、靴を脱いだその先、靴下にじんわりとしみこむ水。

「え？」

足元に広がる、水たまりがある。これはなに？ コレハナニ？  
問つよりも早く、その答えは、私の田玉が見つけた。

赤い糸のまかれた、テテイベア。

『あい、みいつけた』

## あとがき

あとがきは書かないタイプですが、今回ばかりは書かせてください。

私がひとりかくれんぼを書くにあたって、体験した怖い話です。

もともとひとりかくれんぼは軽い気持ち、それこそななみが鬼のあたりだけ書こうと思ってて、連載などはやる気がまったくなかつたのですが、なんとなく続きました。

で、それはおいといてです。軽い気持ちで書き始めたひとりかくれんぼですが、最初のななみ編のところはそこまで自分自身で怖いとは思わず。展開も何もかも掌握してんですよ！むかと。文章の中の世界、怖いわけないじゃないか自分で。

しかし、兄貴のあたりを書き始めたあたりからなんだかじわじわ怖くなつてきて、大学で執筆することにしました。人のいる「コンピュータールームで書こう！」ということだったのですが、大体、12時過ぎから作業して、帰るのは1~8時くらいですかね。15時を回ると、あまり人がいなくなるパソコン室なんですね。

まあじわじわびくびくしながら書くわけです。で、人形が出現するあたりかな。兄貴が廊下に出た人形に宣言するあたり。そこから、背後に視線を感じました。つつても、私は靈感なんてありませんし、そもそもその幽霊とか！信じませんよーいてもいいですけど怖いじゃない！あと、自分が暗示にかかりやすいタイプなのもよくつく知っていますので、気のせいだろうと。気にしないようにしていました。

で、16時過ぎかなあ。また後ろから視線を感じる。振り向いて

みたけれども、部屋には2、3人、てんでばらばらなところでパソコンをいじっている訳です。目線を感じるにしても、遠いしな。気のせいいい加減にしろよな、と思いました。

しかし、17時。今度は、私の手に異変を感じました。私は、これとは別に、二次創作やら何やらで結構文章を書いているのですが、初めて、手が腱鞘炎みたいにつるんです。左手。そりやなんかもうすっごく痛くて、作業中断したほどです。しかし、書きあげたい。書きあげてしまいたい、その一心で、左手をマッサージしつつ、書きたいところまで書きあげることができました。意思の強い私さすがです！と自画自賛をしていたその時です。

ガタン、と椅子が後ろから引つ張られたんです。さすがにびびつて、後ろを振り向きました。しかし、部屋には誰一人として残つていなかつたんです。私以外、誰も。正直、血の気が引きました。

で、次にお家に帰つて画像の色変えをして、さー画像あげつぞ！つて時です。私、よく、「瞬間、～した」という表現を使うんですが、何かもうそういうレベルじゃなかつた。

本当に突然です、私、部屋の真上を向いたんです。真上を向くとほぼ同時、いや、真上に視線を感じると、真上を向いたのは、ほぼ同時でした。なんかもう、順番とかなかつた。言葉にできない、本当に本能的に、でした。いや、なんて言つていいかわかりません。とにかく、上を向いたんです。

でも、何もないんですね。そりやそつだよな～割と新築ですしね～なんて、首を動かして、ロフトの上を見たときに、いたんですね。サムネに使つたティベアが、ロフトから、私のことを見ている

んです。たまたま、撮影に使ったあとに放り投げておいた、その角度。偶然なんです。偶然に、目があつた。しかし、あのモデルになつた人形…とか、あー、怖かつたです。私は。

でも、話に聞くとたいして怖くないでしょう？でも私本当怖かつたんですねその時ばかりは。なんてつたつて、井坂兄貴の家つて、私の家をモデルにして書いているんですから…。

という、怖いよつなそうでない話でした。

ちなみにこの出来事から、なぜか私の中の恐怖はすべて吹っ切れ、今は何の恐怖もなく書いてます。たまに手はおかしくなりますが。ホラーなんて、気の持ちようです。でもひとりかくれんぼはやめておいた方がいいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1830m/>

---

ひとりかくれんば

2011年2月25日00時45分発行